寺院名	天念寺	寺院番号	⑫
所在地	大字長岩屋		
居住状態	無住		
指定文化財	木造阿弥陀如来立像（国有形） 木造釈迦如来坐像（県有形） 木造吉祥天立像（県有形） 木造日光月光菩薩立像（県有形） 木造勢至菩薩立像（県有形） 長岩屋山天念寺（県史跡） 川中不動及び護摩堂跡（県史跡） 天念寺不動種子石碑（市有形） 天念寺大般若経・奥書（市有形） 修正鬼会（国無民） 中島旅館石殿（市有形）		

各種文化財員数	種別	個数
	木造建築	2
	礎石跡等	
	石造物	13
	仏像	8
	美術品	
	古文書	1
	その他	2

特筆すべき文化財		
	・磨崖弘法大師・役行者（写真No.2）	・西ノ坊磨崖碑（写真No.3）
	・身濯神社本殿（写真No.4）	・無縫塔群（写真No.8）
	・鳥居（梅園銘文）（写真No.9）	・円重坊五輪塔群（写真No.15）
	・七郎ヶ迫五輪塔群（写真No.23）	・重蓮坊子供鬼会面（写真No.26）
	・重蓮坊国東塔（写真No.32）	・要本坊地蔵石仏（写真No.38）
	・要本坊宝篋印塔（写真No.40）	・西ノ坊岩屋（写真No.44.45）
	・妙仙坊磨崖板碑（写真No.51）	・影堂岩屋旧在の千手観音立像
	・無明橋	

寺院管理状況

〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉

・現在、本堂内には釈迦如来坐像・日光月光菩薩立像等が安置され管理されている。また、隣接する伝統文化伝承施設「鬼会の里」には、阿弥陀如来立像や出土遺物等が収蔵・公開されている。

・重蓮坊跡に残る地蔵山岩屋や国東塔は、現在二軒により管理されており、お盆などに清掃等が行われている。以前は、岩屋にて子供鬼会が行われていたが、その際に使用していた荒鬼の面が現在井ノ口誠二氏宅に保管されている。また、集落背後の斜面上に無縫塔等の石造物が残されている。

・西ノ坊跡周辺においては、近隣住民の方々への聞き取り調査により、斜面に岩屋と石造仏が存在している可能性が考えられたため、周辺の踏査を行った。その結果、岩屋・石造仏を確認し、撮影した写真の確認作業に協力して頂いた。

寺院史概略

・長承四年（1135）の「六郷山夷山住僧行源解状案」には、「長岩屋住僧在判三人」とあり、12世紀前半にはその活動が確認できる。また、本堂に安置される釈迦如来坐像・日光月光菩薩立像・勢至菩薩立像や小両子岩屋の阿弥陀如来立像（現在鬼会の里に展示）は12世紀代の作とされている。

・『六郷山年代記』には、建保六年（1218）に長岩屋で堂供養が行われたと記される。

・安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』では、六郷山中山の筆頭に記されており、年中行事は惣山屋山に次ぐ規模である。

・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「長岩屋山　限東赤丹畑大タウケト号、限西恒吉西福寺下谷、限南尾ノ鼻ヨリ加礼河マテ大道、限北美尾」と寺域が記載されている。その寺域は、現在の大字長岩屋の範囲と一致するとされる。

・門ノ坊跡のガランと呼ばれる場所に暦応四年（1341）銘の石殿（現在豊後高田市内に移設）が位置していた。銘文には六郷山執行職であった円豪・快円・円位・円然・円増を含めた11名の僧侶の名が刻まれる。

・応永二十五年（1418）の「長岩屋屋敷注文」には、62ヶ所の屋敷名が記されており、長岩屋の範囲内に分布している。

寺院現況及び変更点

〈Ａ地点（講堂周辺）〉(図版②、③：境内図・境内拡大図参照)

・講堂は、その柱に残る峯入り時の墨書から嘉永六年（1853）以前の建造と考えられている。現在、鬼会の観覧場所の確保のため、やや増築されている。（写真№１）『六郷山年代記』には、応永十一年（1404）に「長岩屋山講堂・権現堂焼了」と記載されている。また、講堂西側に板碑や庚申塔、磨崖仏（写真№２）などが存在している。さらに道路に沿って西側へ下ると磨崖碑（写真№３）が確認できる。

〈Ｂ地点（身濯神社周辺）〉(図版③：境内拡大図参照)

・身濯神社(六所権現社）の本殿は文政十一年（1828）（写真№４）、拝殿が嘉永六年（1853）頃に建立されたことが保存されている棟札によって確認されている。近年、拝殿手前の石段の脇に、狛犬２体と石造仁王像２体が新たに寄進されている。また、拝殿手前には石灯篭や石塔の笠部材と思われる石材が多数置かれている。その他、寛政二年（1790）の銘が残る盥盤（写真№６）や、本殿東側には石造仏群及び再建碑が安置されている。（写真№７）

〈Ｃ地点（倉庫周辺）〉(図版③：境内拡大図参照)

・倉庫東側において無縫塔群（写真№８）が存在している。五輪塔１基もみられるが、雑草などによりやや荒れている印象を受ける。

〈Ｄ地点〉(図版③：境内拡大図参照)

・地蔵・鳥居柱部の残欠などが存在している。（写真№９）

〈Ｅ地点（岩屋）〉(図版③：境内拡大図参照)

・岩屋の中に木造の堂が造られ、その中に石造仏９躯が安置されている。（写真№10）

〈Ｆ地点（堂宇跡）〉(図版③：境内拡大図参照)

・石組による礎石のみが残されている。（写真№11）

〈Ｇ・Ｈ地点（天念寺本堂・庫裡跡）〉(図版②：境内図面参照)

・天念寺本堂（Ｇ）と庫裡跡（Ｈ）については、昭和16年の水害で流出しており、本堂はその後造り変えられたものである。庫裡跡は、現在駐車場になっている。（写真№12）

・本堂内には、木造釈迦如来坐像・木造日光・月光菩薩立像・木造吉祥天立像・木造不動明王立像・木造阿弥陀如来坐像が安置される。また、鬼会の里資料館には木造阿弥陀如来立像・木造勢至菩薩立像・木造千手観音立像が安置される。

〈Ｉ地点（円重坊跡）〉(図版①、②：詳細位置図・境内図面参照)

・庫裡跡（Ｈ）の北側に民家があり、その周辺が円重坊跡と推定されている。近世時期の坊跡とされていたが、調査により13～16世紀代の遺物が確認されたため、中世段階で成立していたと考えられる。また、民家の背後には多数の五輪塔が安置されている。（写真№15）

〈Ｊ地点（川中不動）〉(図版③：境内拡大図参照)

・講堂の前を流れる長岩屋川の中に存在する巨石に不動明王像及び左右に制吒迦童子・矜羯羅童子が彫られている。（写真№16）仁聞作とされているが、室町時代以降の作と推定されている。近年、巨石からは陶製経筒が発見された。

〈Ｋ地点〉(図版③：境内拡大図参照)

・身濯神社より長岩屋川を渡った対岸に位置する場所に文殊種子石碑（市指定有形文化財）が存在している。安山岩に文殊菩薩の種子を含む銘が施されている。金剛仏子阿闍梨順賢によって建武四年（1337）に造られたとされ、近世のものが多い境内の石造物に比べ比較的古い石造物である。（写真№17）

〈Ｌ地点（大満坊跡）〉(図版③：境内拡大図参照)

・大満坊跡は、現在地区の公民館が立地している。（写真№18）この大満坊跡から南側の斜面地に七郎ヶ迫五輪塔群が存在しており、鎌倉末～室町期の作とされる。（写真№23）

〈Ｍ地点（二本坊跡周辺）〉(図版③：境内拡大図参照)

・以前の調査では存在していた建物２棟が取り壊されており、現在更地になっている。（写真№19）また、周辺には五輪塔、石塔、石灯篭の各部材が散布している。坊跡の南側は「ショウニンガツカ」と呼ばれており宝篋印塔・角塔婆・五輪塔群が位置している。（写真№20.21）また、岩屋状の掘り込みが残るが、中には石造物は残されていない。（写真№22）

〈周辺坊跡〉(図版①：詳細位置図参照)

天念寺周辺には、本坊・円重坊・祇園坊・要本坊・西ノ坊・畔津坊・大満坊・妙仙坊・門ノ坊・二本坊・仙堂坊・重蓮坊の坊跡が残されており「天念寺12坊」と呼ばれている。これら坊跡の成立について、応永二十五

年（1418）の『六郷山長岩屋住僧屋敷注文』には、62ヶ所の屋敷地名が記載されているが、坊については妙門坊・西ノ坊のみである。その中でも妙門坊については、現在の12坊にその名称は残されていない。現在の坊跡は、応永25年の注文に記載された屋敷地の系譜を引くものが、近世段階で整備されたものと思われる。

◎重蓮坊

・重蓮坊では背後の山中に地蔵山岩屋が位置している。地蔵山岩屋では、昭和12年頃まで子供鬼会が行われており、その際に使用した荒鬼の面が現在井ノ口誠二氏宅に保管されている。（写真№26）岩屋は、集落よりミカン畑の間を抜ける里道を上りつめた地点より左側の急傾斜の竹林を直線的に登った先に立地している。現在、岩屋内に石垣で形成された基壇上に御堂がたてられている。（写真№24）堂内には、本尊である木造地蔵菩薩坐像を含めた５躯の仏像が安置されている。（写真№25）御堂向かって右側には、山神を祀っている石祠も存在している。周辺では、18世紀後半頃の染付碗や中世段階の土師器坏片が少量であるが散布している。
・重蓮坊の集落より岩屋へ続く里道沿いには、五輪塔の残欠（写真№27）がみられる。
・井ノ口誠二氏宅の南側隣接地には「寺跡」と伝わる畑地が残る（写真№28）。その「寺跡」の僧侶の墓碑と伝わる無縫塔１基が、集落背後の高台に位置しており、「享保十年（1725）、権律師□澄大徳」の銘が残る。（写真№29）無縫塔周囲にその他の石造物は確認できなかった。この無縫塔の位置する平坦面の一段下の崖面に、方形状の龕が見られ石造比丘尼像１躯が安置されている。（写真№30）その前面の平坦面には、墓碑と想定される板状の自然石が３基並列していた。（写真№31）無縫塔や石造仏・板状墓碑は井ノ口誠二氏によって管理されているが、石造仏・板状墓碑は２年程前にその存在に気づいており、由来等は聞いていないという。
・重蓮坊集落の東側の低い尾根上には国東塔１基・板碑・五輪塔・一石五輪塔が位置している。（写真№32）国東塔は室町期の作とされている。
・国東塔の位置する尾根よりさらに東側の岩尾根上に井ノ口誠二氏家の古墓と伝わる２基の位牌型墓碑がみられる。（写真№33）

◎要本坊

・石段（写真№36）を登った直ぐ右手に、損傷が著しいが室町期の宝篋印塔（写真№40）が存在している。御堂（写真№37）は近年建て直されたようであり、以前の御堂の礎石跡が確認できる。（写真№39）また、堂内に弘法大師像など計５躯の仏像が安置されている。内、１躯は南北朝期の作とされる。（写真№38）

◎祇園坊

・祇園坊跡の裏において龕が存在しており、石造仏が３躯確認できる。（写真№41）

◎西ノ坊

・Ａ地点で報告した磨崖碑から西側の山裾周辺が西ノ坊にあたる。周辺の聞き取り調査と踏査を行った結果、近世墓地（写真№42）及び岩屋を２箇所で確認した。岩屋は、現在駐車場となっている地点から参道（写真№43）を北側へと入り直線的に登ると急斜面の上段に岩肌を方形状に彫り込まれている。（写真№44・45）以前は仏像も存在していたということであるが、現在は残されておらず、木製の格子部材の残欠が確認できる程度である。この岩屋から20m程西側へ移動すると、自然の岩が組み合わさった岩屋（写真№46）の中に石造仏が１体確認することができる。石造仏は半分ほど埋没した状態で置かれている。（写真№47）
・磨崖碑の西側の山裾に、刳り貫かれた大石が位置している。（写真№48）この大石より入った斜面上に角塔婆・一石五輪塔・五輪塔群を確認した。（写真№49）道路拡幅工事の際に、現在地に移設したものである。また、平成27年に近くで磨崖碑を発見した。

◎妙仙坊

・大石に磨崖碑が刻まれている。（写真№50・51）

◎仙堂坊

・仙堂坊は、かつての都甲小学校の分校前付近が遺称地である。周辺の踏査を行った結果、分校跡地の裏側の山裾において近世段階と考えられる五輪塔群が確認できた。（写真№52）
・背後の屋根上には、大乗妙典一字一石塔や石祠が位置する。

◎畔津坊・門ノ坊

・畔津坊については、アゼツ井戸やアゼツ畠といった遺称地と考えられる場所は存在しているが、両者は距離的に離れており、正確な位置は不明である。門ノ坊跡には、現在石造物などは認められない。以前は「ガラン」と呼ばれる広場や「暦応四年」の銘を持つ石殿が存在していたが、現在豊後高田市内の中島旅館に移設されている。

〈天念寺岩屋〉（図版②：天念寺岩屋位置図参照）

・天念寺の北側に位置する岩尾根には、『天念寺由緒書』によると９ヶ所の岩屋が位置していると記載されている。その中でも小両子岩屋・龍門岩屋については、安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』や建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』において、中山末寺として「小両子岩屋

龍門岩屋　長岩屋ノ末寺也」と記載されている。その他の岩屋については、宝暦五年（1755）の『豊前豊後百八十三ヶ所霊場記』に記載されていないが、宝暦十年（1760）に成立した豊後四国八十八ヶ所霊場の札所となっていることから、その頃に開かれたものと考えられている。

◎忌堂岩屋

・円重坊背後から山道へと入ると、直ぐ左側に岩屋が立地している。（写真№53）やや大きめの岩屋の中に、御堂が左右２ヶ所安置されている。
・左側の御堂には、石造弘法大師像と石造観音像の２躯が安置されており（写真№54）、観音像の裏側には「杵築 若松山重右衛門」の銘が確認できる。
・右側の御堂（写真№55）には、時期的に新しいと思われる国東塔の笠から相輪と台座の部材・板碑・菩薩像・板状五輪塔が安置されている。（写真№56）
・岩屋右側の端部には、一石五輪塔２基が確認できる。また、岩屋の中央部には１ｍ程の穴が開いている。

◎小両子岩屋

・山頂へ向かう山道に沿う形で、岩屋が存在している。（写真№58）岩屋は左右２ヶ所の窪みから構成されており、左側の岩屋には30体程の観音像が集約されて安置されている。（写真№59）また、この観音像の安置されている地点周辺には、以前の御堂跡と考えられる礎石やほぞ穴が確認できる。その他、土師器坏の小片も散布している。
・右側の岩屋には、新しい御堂（写真№61）が位置しており弘法大師像２躯が安置されている。（写真№62）また、この二つの岩屋の間に風化しているが、磨崖宝塔が確認できる（写真№60）
・現在「鬼会の里」に安置される阿弥陀如来立像が旧在していた。

◎鳥岩屋

・小両子岩屋より山頂へ向かう山道左手側に立地している。（写真№63）岩屋は岩盤を削って造られた階段を登り、その上段に不動明王像１躯と千手観音像１躯が安置されている。（写真№64）他の岩屋と比較するとやや小規模な岩屋である。

◎福永岩屋

・小堂は朽ちているが、その内部に石造仏２躯が安置されている。（写真№65）石造仏は、千手観音像１躯と毘沙門天像と思われる石造仏が１躯である。（写真№66）

◎火灯岩屋

・山頂へ向かう垂直な崖面の上に存在する岩屋である。（写真№67）岩屋には多数の観音像が安置されており、中には風化の目立つものが確認できる。（写真№68）その他、弘法大師像などが祀られた御堂などが立地している。（写真№69）この岩屋から上段へ鎖を使用し登ると、北側へ抜けることのできる穴が開いている。

◎龍門岩屋

・龍門岩屋は、無明橋の手前にある宝篋印塔などの石造物が存在している地点（写真№70）から尾根を東南方向へ移動した地点に立地している。岩屋には、岩盤を削って造られた階段状の岩面の上に多数の観音像が安置されている。また、弘法大師像や千手観音像と思われる石造物を安置してある小堂が設けられている。（写真№71～74）

◎影堂岩屋

・火灯岩屋から、山の岩面が露頭している箇所に沿って山を下った地点に影堂岩屋は存在している。岩屋の前面には、御堂の廃材が整理されて置かれている。（写真№75）岩屋内には、石造観音像１体と石造菩薩像が１体安置されている。（写真№76）現在「鬼会の里資料館」内に安置される千手観音立像は、この影堂岩屋に旧在した。

◎門出岩屋

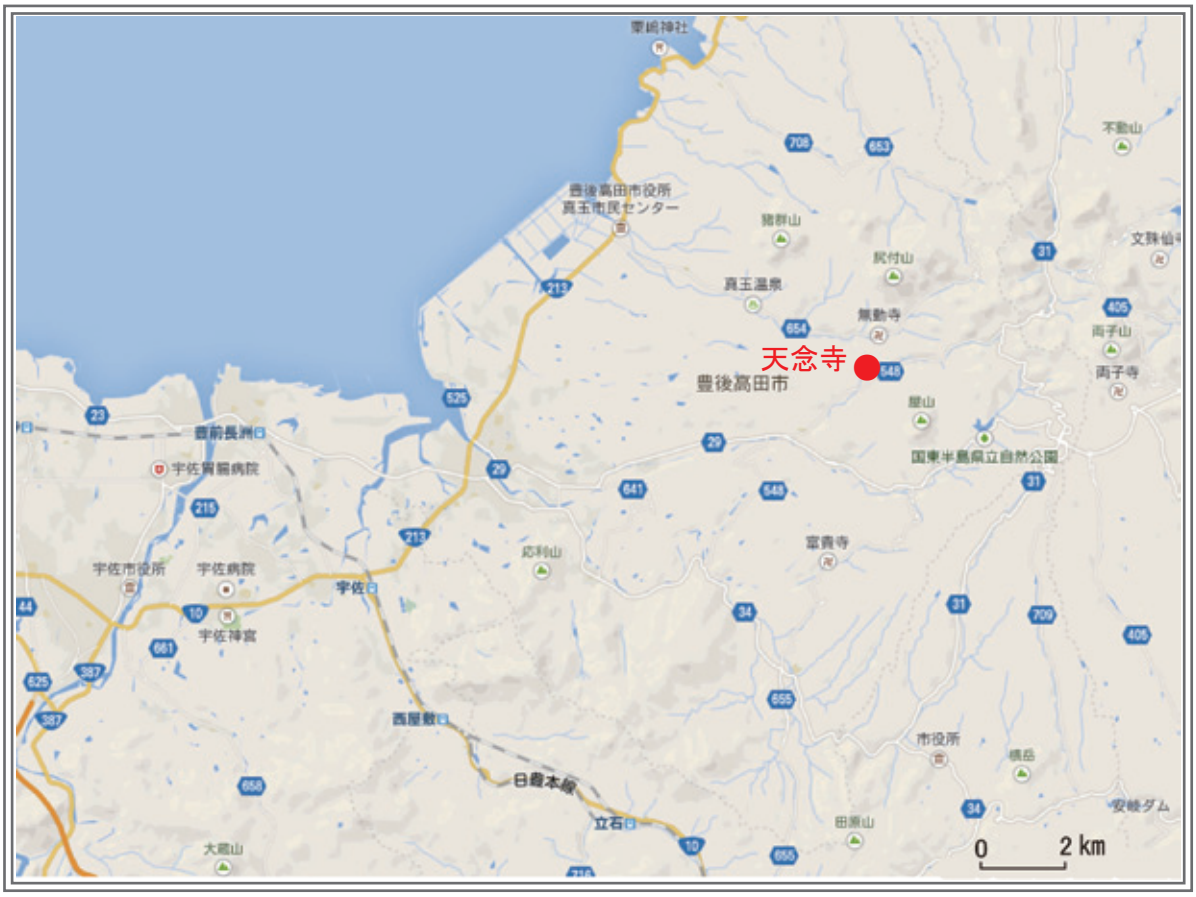
・門出岩屋は、影堂岩屋のある岩面の反対側に位置しており、他の岩屋と比べ奥まった地点にあるような印象を受ける。（写真№77）岩屋内には、石造仏が３躯置かれている。（写真№78）

≪主要参考文献≫

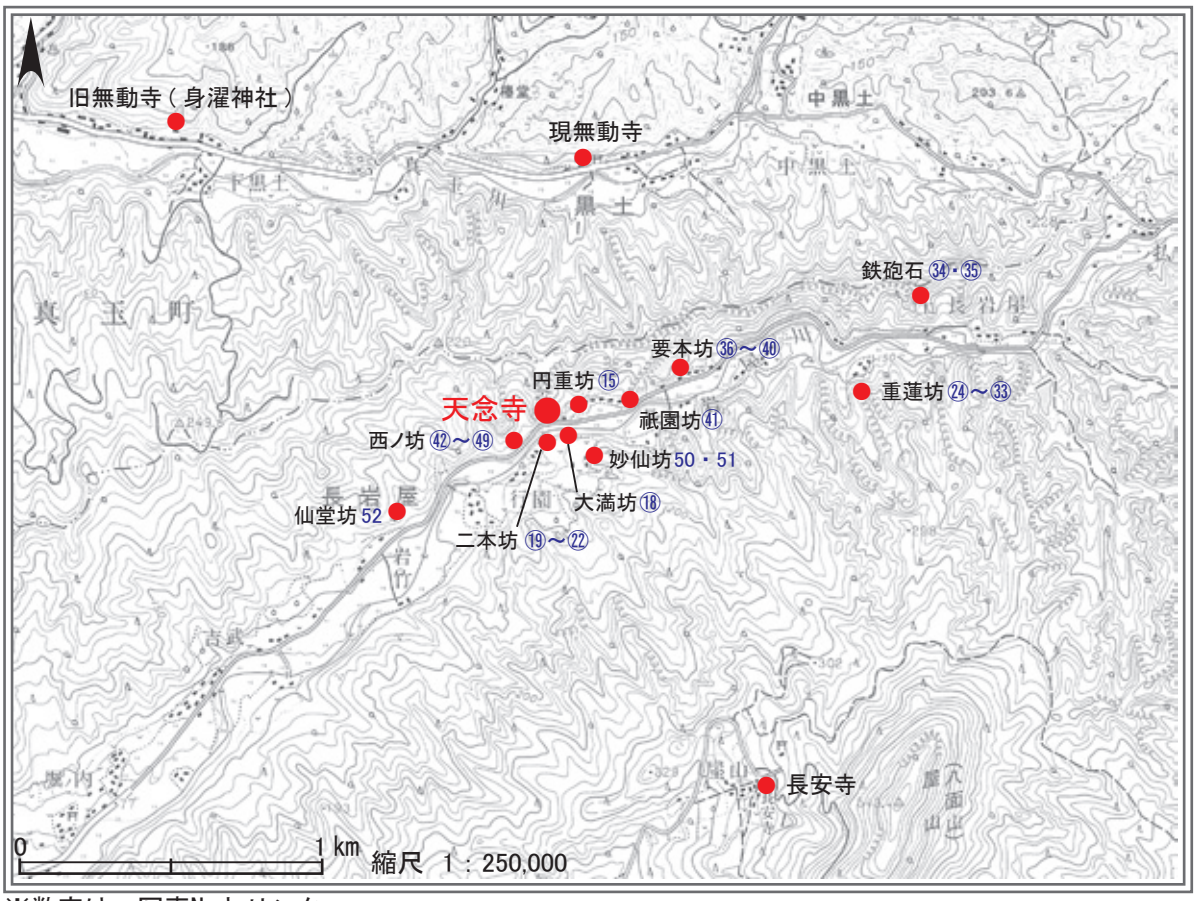
・『豊後国都甲荘の調査　本編』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 11 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1993
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ』 大分県立歴史博物館調査報告書第４集　大分県立歴史博物館　2000
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要ー豊後高田市・真玉町・香々地町の部ー』 大分県文化財調査報告書　第 37 輯　大分県教育委員会　1976

図版①　　天念寺　位置図

市域位置図



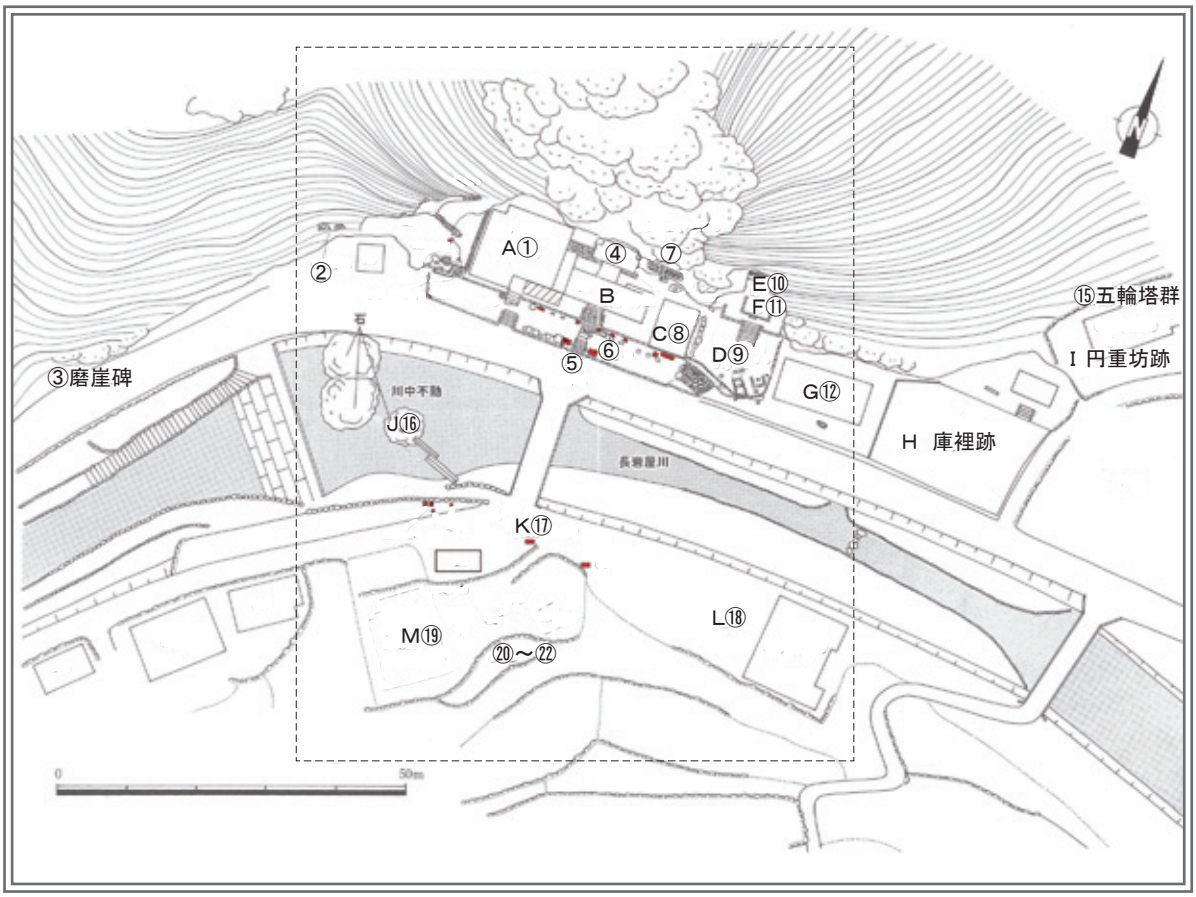
詳細位置図



※数字は、写真№とリンク

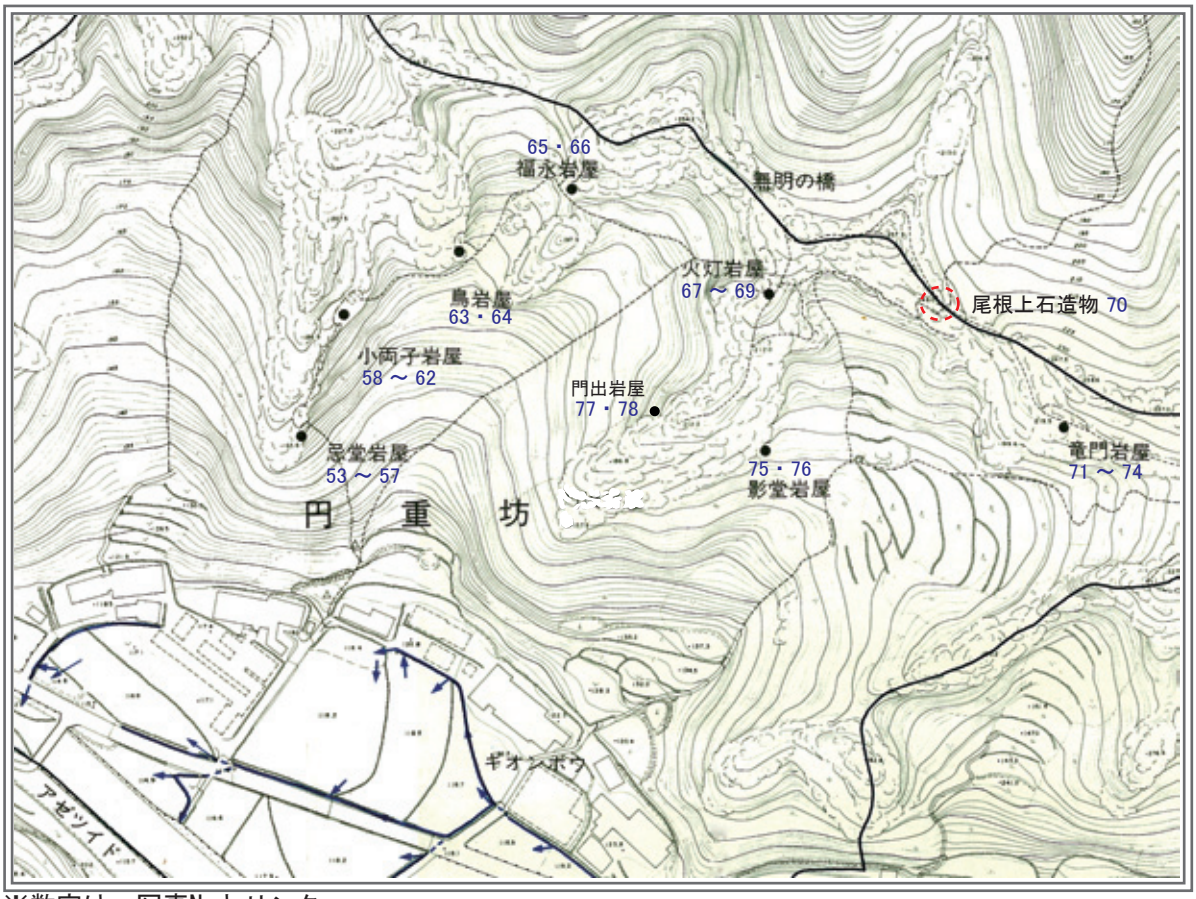
図版②　　天念寺境内図・天念寺岩屋位置図

境内図



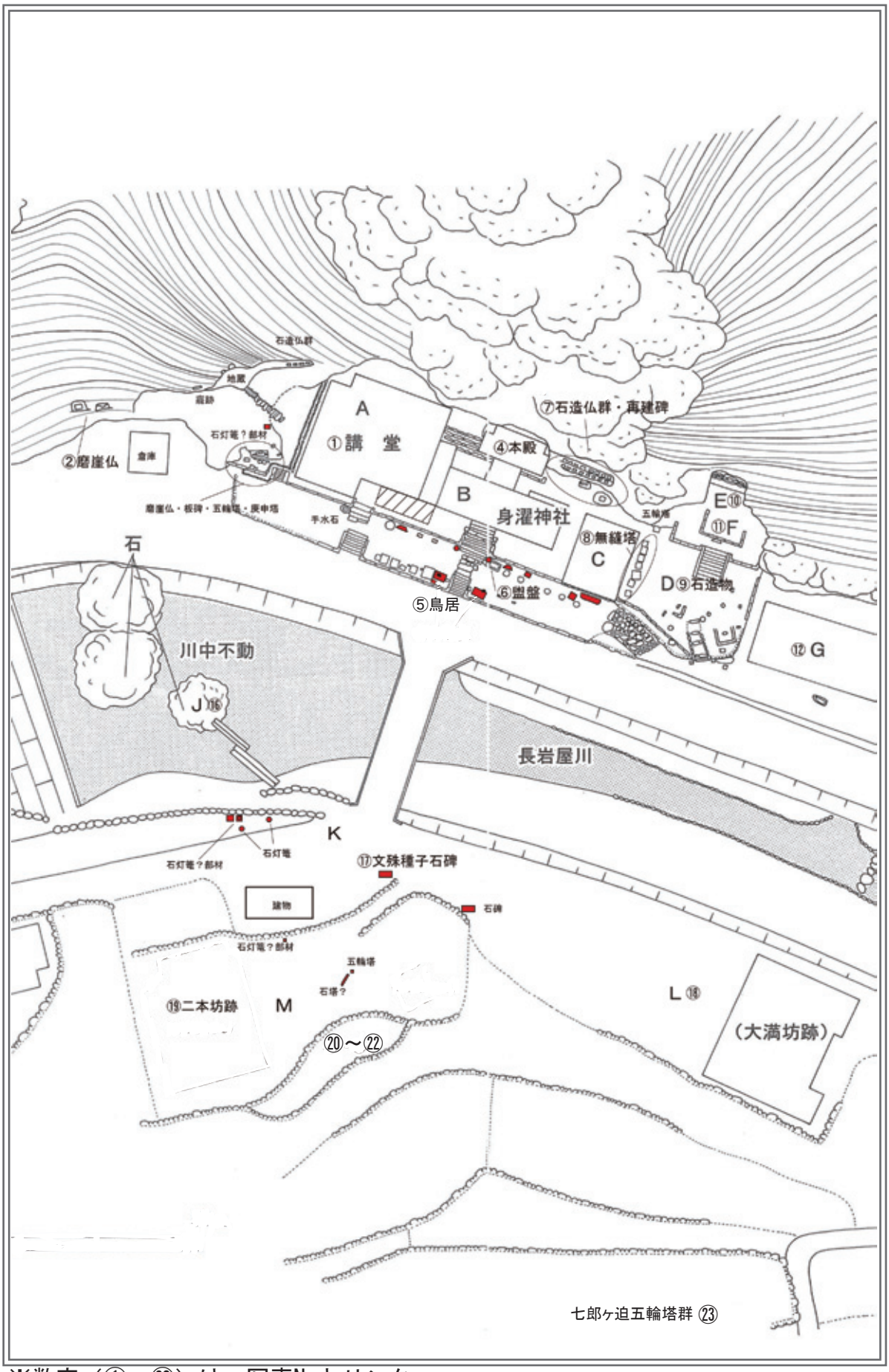
※数字は、写真No.とリンク　※破線内は図版③参照

天念寺岩屋位置図



※数字は、写真No.とリンク

図版③　天念寺境内拡大図



※数字（①～㉓）は、写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：天念寺講堂　図版②、③：Ａ地点／時期：嘉永６年以前

・『六郷山年代記』に応永十一年（1404）に火災にあったと記載される。
・修正鬼会の観覧場所として、庇部分が増改築されている。

2：磨崖仏　図版②、③：Ａ地点／時期：室町時代

・龕の中に、頭巾をかぶり、右手に錫杖を持った役行者像が彫られる。
・以前の報告では、周辺に五輪塔が多数あったようである。

3：磨崖碑　図版②：Ａ地点／時期：永禄５年～天正８年

・間口336cm、天地107cmの龕を三つに区画し、各区画の壁面に二個宛短冊形の位牌が彫り込まれる。陰刻や墨書によって「天正八年」（1580）や「永禄五年」（1562）の銘がみられる。
・この磨崖碑付近から西ノ坊の範囲にあたる。

4：身濯神社本殿　図版②、③：Ｂ地点／時期：文政11年

・文政十一年（1828）に建立されたことが保存されている棟札により確認されている。

5：鳥居　図版②、③：B地点／時期：寛政元年

・仁王像の建立に伴い、石塔の笠部材などが以前の図面と比較すると移動していることが確認された。
・「奉寄進鳥居一宇」「寛政元年己酉(1789)四月中旬」の銘が残る。

6：盥盤　図版②、③：Ｂ地点／時期：寛政２年

・寛政二年（1790）銘が残る盥盤が1点残されている。

文化財の現況・詳細（2）

7：石造仏・再建碑　図版②、③：Ｂ地点／時期：近代

・右側に拝殿の再建碑、左側に村社維持金寄付名記が残る。
・上段には羅漢像が安置されている。

8：無縫塔群　図版②、③：Ｃ地点／時期：元禄期

・元禄二年（1689）の権律師慶眼和尚など７基の無縫塔が残る。

9：Ｄ地点石造物　図版②、③：Ｄ地点／時期：近世

・現状で、鳥居柱部の部材や地蔵像、その他石造物の残欠がみられる。鳥居は昭和16年の水害まで川の対岸にあったもので、三浦梅園の詩文が銘として入っている。身濯社の前にも平成元年に河川から出土した鳥居の一部が残っている。

10：岩屋　図版②、③：Ｅ地点／時期：－

・岩屋の中に、木造の堂がある。その中に、合計９躯の石造仏が安置されている。

11：堂宇跡　図版②、③：Ｆ地点／時期：－

・岩屋の前面に堂宇の礎石が残される。

12：天念寺本堂・庫裡跡　図版②：Ｇ・Ｈ区／時期：現代

・本堂・庫裡は昭和16年の水害により流されている。
・本堂は再建されたが、庫裡は駐車場になっている。
・本堂内には釈迦如来坐像・日光月光菩薩立像等が安置されている。

13：本堂内仏像

本堂内／時期:平安後期

・須弥壇内に釈迦如来坐像、日光・月光菩薩立像、吉祥天立像が安置される。

14：資料館内仏像

資料館内／時期:平安後期・江戸時代

・展示室に阿弥陀如来立像・勢至菩薩立像・千手観音立像が安置される。
・阿弥陀如来立像は小両子岩屋、千手観音立像は影堂岩屋に旧在していた。

15：円重坊跡

図版①、②：Ｉ地点／時期：13世紀以降

・鬼会の里建設に伴う発掘調査により、13世紀～16世紀代の遺物が確認されている。
・坊跡の背後に残る五輪塔群は、鎌倉末～室町とされる

16：川中不動

図版②、③：Ｊ地点／時期：室町以降

・中心の不動明王は、高さ3.3mで、15世紀前半頃の作とされる。
・不動の左右には、制吒迦童子・矜羯羅童子が彫られる。（県指定史跡天念寺に附）

17：文殊種子石碑

図版②、③：Ｋ地点／時期：建武４年

・境内から長岩屋川を挟んだ対岸に位置している。
・安山岩に文殊菩薩の種子や建武四年（1337）銘が刻まれる。（市指定有形文化財）

18：大満坊跡

図版②、③：Ｌ地点／時期：鎌倉～近世初頭？

・十二坊跡の一つであり、現在は地区の公民館が立地している。

文化財の現況・詳細（4）

19：二本坊跡　図版②、③：M地点／時期：近世初頭？

・現在は、建物が取り壊され更地になっている。
・周辺に五輪塔等の石塔部材が散布している。

20：ショウニンガツカ五輪塔　図版②、③：M地点／時期：中世

・二本坊跡の南側、一段高い平坦面に位置する。
・ショウニンガツカと呼ばれており石造物群が見られる。

21：ショウニンガツカ石造物群　図版②、③：M地点／時期：中世

・五輪塔部材が広い範囲に見られる。

22：ショウニンガツカ岩屋状の掘り込み　図版②、③：M地点／時期：－

・岩屋状の掘り込みが残るが、中には五輪塔部材が１点残るのみである。

23：七郎ヶ迫五輪塔群　図版③参照／時期：鎌倉末～室町期

・大満坊から南側へ登った斜面地の一角に位置する。
・鎌倉末～室町期の五輪塔群が集積されている。
・昭和45年の調査で４基の石棺が確認されている。１号墓からは20～30才代の女性人骨片が出土している。

24：地蔵山岩屋（重蓮坊）　図版①参照／時期：中世段階？

・石垣による基壇上に小堂が建てられる。写真奥に山神を祀る石祠がみえる。
・小堂はかなり破損している。
・周辺には、中世土師器片や近世磁器などが散布している。

25：堂内石造仏　図版①参照／時期：近世

・本尊である木造地蔵菩薩坐像を中心に計５躯の仏像が安置されている。
・地蔵菩薩には、「天明三年（1783）」の銘が残る。

26：子供鬼会面（重蓮坊）　井ノ口家保管／時期：近世

・地蔵山岩屋では、昭和12年頃まで子供鬼会が行なわれており、その際に使用していた面が、井ノ口誠二氏宅に保管されている。

27：五輪塔残欠　図版①参照／時期：－

・地蔵山岩屋へ向かう里道沿いに五輪塔残欠が置かれている。
・上段の斜面から崩落したものである。

28：伝寺跡　図版①参照／時期：－

・井ノ口誠二氏によるとお寺の跡と伝え聞いているという。
・井ノ口誠二氏宅の南側に隣接している。

29：重蓮坊無縫塔　図版①参照／時期：享保10年

・重蓮坊集落背後の高台の先端部に享保十年（1725）銘の無縫塔が１基立地している。
・井ノ口誠二氏のご家族により、管理されている。

30：重蓮坊石造仏　図版①参照／時期：近世か

・無縫塔より一段下の平坦面の崖面に方形状の龕があり石造比丘尼像が祀られる。
・井ノ口誠二氏によって管理されているが、２年程前にその存在に気付いたという。

31：板状自然石墓碑

図版①参照／時期：－

・平坦面に板状の自然石を使用した墓碑が３基位置している。
・井ノ口誠二氏によって管理されているが、比丘尼像と同様に２年前にその存在に気づいており由来等は聞いていないという。

32：重蓮坊石塔群

図版①参照／時期：室町期

・重蓮坊集落内の高台に、国東塔・板碑・五輪塔・一石五輪塔等が位置する。
・国東塔は室町時代の作といわれている。
・石塔群は井ノ口家によって管理されている。

33：井ノ口家古墓

図版①参照／時期：天明５年

・井ノ口家の東側の岩尾根上に古墓が位置している。浄土真宗系の戒名が残るが磨滅が激しい。
・左側が天明五年（1785）銘で、右側が文政五年（1822）銘である。
・この２基以降は、井ノ口家の南側近接地の墓地に埋葬される。

34：鉄砲石

図版①参照／時期：－

・重蓮坊と田原地の中間、長岩屋川左岸の岩山中腹に位置する岩屋である。
・外見から鉄砲石と呼ばれている。

35：鉄砲石近景

図版①参照／時期：－

・別名「鬼死石（オンシイシ）」と呼ばれている。
・鬼会の時に、鬼役の僧侶が結界の外に出たため、面が取れなくなり、この岩屋で亡くなっていたとの伝説が残る。
・戦後すぐ岩屋に刀等を隠したという。

36：要本坊参道

図版①参照／時期：近世初頭？

・参道の石段は、不安定である。

37：要本坊お堂　図版①参照／時期：－

・堂は近年新築されている。
・経典を虫干ししたお経石があると報告されているが確認できなかった。（『私の郷土探訪』岩野　勝　1980）

38：堂内　図版①参照／時期：南北朝後期

・堂内には木造仏１躯・石造仏４躯が安置されている。
・堂内右端の地蔵石仏は、その作風から南北朝後期とされる。

39：旧堂礎石　図版①参照／時期：－

・旧堂の礎石が、新堂の背後に残されている。

40：宝篋印塔　図版①参照／時期：室町期

・参道を上ると右側に宝篋印塔が位置している。
・相輪・笠部を欠くが、室町時代の作とされている。

41：祇園坊　図版①参照／時期：－

・倉庫の裏側に岩肌を刳り貫いて龕が形成されている。
・石造仏が３躯安置されている。

42：西ノ坊　墓碑　図版①参照／時期：延宝２年

・岩屋への入口付近に近世墓地が残る。
・延宝二年（1675）銘の板碑型墓碑がみられる。

43：西ノ坊岩屋参道　図版①参照／時期：－

・岩屋へと急斜面を直線的に参道が延びる。

44：西ノ坊岩屋側面　図版①参照／時期：－

・岩屋は岩肌を方形状に刳り貫いている。

45：西ノ坊岩屋正面　図版①参照／時期：－

・岩屋内部には、格子目状の部材が残るが破損が激しい。
・岩屋内に石造仏は、現存しないという（未確認）。

46：西ノ坊岩屋正面　図版①参照／時期：－

・上記岩屋の左下側にほぼ隣接している。

47：西ノ坊岩屋近景　図版①参照／時期：－

・岩屋内に石造仏が１躯安置されるが、その半分が埋没している。

48：大石　図版①参照／時期：－

・道路沿いに風呂状に刳り貫かれた大石が位置している。

49：石造物群　図版①参照／時期：中世

・上段に角塔婆・一石五輪塔・五輪塔が見られる。
・道路拡幅工事により法面上に移動している。

50：妙仙坊全景　図版①参照／時期：近世

・現在は大型の磨崖板碑と近世と思われる墓碑が確認できる。

51：妙仙坊磨崖板碑　図版①参照／時期：慶長15年

・妙仙坊跡に残る巨石に磨崖板碑が刻まれている。
・慶長十五年（1610）の紀年銘と「金躰堯秀大徳」「西山□□大徳」の法名が残る。

52：仙堂坊石造物群　図版①参照／時期：近世

・都甲小学校の分校跡地の前に遺称地がある。
・分校の裏側に近世の五輪塔が分布している。
・背後の屋根上に大乗妙典供養塔等が位置している。

53：忌堂岩屋全景　図版②参照／時期：近世

・『天念寺由緒書』に「弐間ニ三間　本尊五輪塔三本」と記される。
・岩窟の左右２ヶ所に堂がみられる。

54：左側堂宇　図版②参照／時期：江戸中期

・左側の堂は、破損が激しい。
・堂内に弘法大師像と観音像が安置される。観音像の背面に「杵築若松山重右衛門」の銘が残る。江戸時代中期の作と考えられる。

55：右側堂宇　図版②参照／時期：戦国期

・堂の破損が激しい。
・堂の右側に一石五輪塔が２基みられる。本尊と記される五輪塔であろうか。
・一石五輪塔は、戦国時代の作と考えられる。

56：右側堂内　図版②参照／時期：室町期

・堂内には板碑・観音像・板状五輪塔が安置されている。
・室町時代の国東塔の残欠が１基残る。

57：忌堂岩屋参道　図版②参照／時期：－

・かなり急傾斜で直線的な参道である。

58：小両子岩屋全景　図版②参照／時期：12世紀代？

・『天念寺由緒書』に「弐間四方堂壱宇　本尊阿弥陀如来」と記される。
・現在、「鬼会の里」にて収蔵・公開されている阿弥陀如来立像は、この岩屋に所在したものである。12世紀の造立とされている。
・岩肌の左右両側に岩屋状の抉りがみられる

59：左側石造仏群　図版②参照／時期：近世

・左側の岩屋には石造観音像が多数安置される。岩肌には加工痕や前庭部に礎石が残るため堂宇が存在したと思われる。その部材は残されていない。
・観音像は江戸時代中期の作と考えられる。

60：磨崖宝塔　図版②参照／時期：－

・左右両岩屋の中間の岩肌に磨崖宝塔が１基彫られる。

61：右側堂宇　図版②参照／時期：－

・右側に位置する岩屋状の抉り内に堂宇が所在している。
・近年、新築されている。

62：右側堂内　図版②参照／時期：近世

・堂内には弘法大師像が２躯安置されている。

63：鳥岩屋全景　図版②参照／時期：－

・『天念寺由緒書』に、「壱間四方　本尊大聖不動明王」と記される。
・ほぼ直立する岩肌に設けられており、参道は削り出して階段としているが、風化が激しい。
・小堂が残るが破損が激しい。

64：小堂内　図版②参照／時期：江戸中期

・小堂内に石造観音坐像１躯・石造不動明王坐像１躯が安置される。
・江戸時代中期の作と考えられる。

65：福永岩屋全景　図版②参照／時期：－

・『天念寺由緒書』に、「壱間四方　本尊毘沙門天王」と記される。
・小堂が残るが破損が激しい。

66：小堂内　図版②参照／時期：－

・毘沙門天像１躯・石造観音坐像１躯が安置される。

67：火打岩屋全景　図版②参照／時期：－

・『天念寺由緒書』に、「三間ニ一間　本尊大日如来其ノ他仏数多」と記される。
・写真には見えないが、四国八十八ヶ所霊場の小堂が残る。
・写真に見える石祠は、昭和43年の供養地蔵である。
・写真右側の岩肌を方形状に刳り抜いて岩屋が形成されている。

68：石造仏群　図版②参照／時期：－

・岩屋内に石造観音坐像が多数安置されるが、大日如来とされる像は確認できない。
・観音像の一部は風化が激しい。
・江戸時代の作と考えられる。

69：小堂内　図版②参照／時期：近世？

・八十八ヶ所霊場の小堂内に、弘法大師像１躯・観音像１躯が安置されている。

70：尾根上石造物群　図版②参照／時期：室町期

・龍門岩屋の西側に宝篋印塔１基、五輪塔１基が位置している。
・真玉側へと降りる分岐の石段に「石段同村施行明石孫右衛門安永九年（1780）三月吉日」とある。

71：龍門岩屋全景　図版②参照／時期：近世

・『天念寺由緒書』に、「三間ニ壱間　本尊観世音其外諸仏数多」と記される。
・岩肌は大きく抉れており、小堂が２ヶ所、加工成形された岩屋が１ヶ所残る。

72：左側小堂内　図版②参照／時期：近世

・左側の小堂内に弘法大師像１躯、石造観音坐像１躯が安置される。

73：右側小堂内　図版②参照／時期：近世

・右側の小堂内に弘法大師像１躯、石造観音坐像１躯、石造不動明王立像１躯が安置される。

74：石造仏群　図版②参照／時期：近世

・方形状に岩屋として成形されている。
・観音像が多数安置されている。

75：影堂岩屋全景　図版②参照／時期：近世

・『天念寺由緒書』に、「壱間四方堂壱宇　本尊千手観音菩薩外諸尊数多」と記される。
・堂宇の部材が解体されていた。

76：岩屋内　図版②参照／時期：近世

・石造観音坐像が２躯安置されている。

77：門出岩屋全景　図版②参照／時期：近世

・『天念寺由緒書』に、「壱間四方　本尊馬頭観世音菩薩」と記される。

78：岩屋内　図版②参照／時期：近世

・岩屋内には石造の坐像が３躯安置されている。

寺院名	長　安　寺		寺院番号	⑬
所在地	大字加礼川屋山			
居住状態	有住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	木造太郎天立像（国有形） 二童子立像（国有形） 銅板法華経（国有形） 銅筥（国有形） 長安寺の太鼓（県有形） 金剛山長安寺（県史跡） 長安寺国東塔（県有形） 長安寺宝篋印塔（市有形） 虚空蔵菩薩坐像（市有形） 庵ノ迫板碑（県有形）		木造建築	
			礎石跡等	1
			石造物	6
			仏像	9
			美術品	3
			古文書	
			その他	1
特筆すべき文化財	・オト様板碑群（写真№13）	・谷ノ坊五輪塔群（写真№16）		
	・板碑（墨書有り）（写真№18）	・講堂跡（写真№23）		
	・阿弥陀如来坐像（写真№26）	・菩薩立像（写真№43）		
	・菩薩立像（写真№44）	・如来坐像（写真№45）		
	・如来坐像（写真№46）	・峯坊観音像（写真№69）		
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・本堂には、須弥壇に本尊である千手観音立像・阿弥陀如来坐像が安置されている。 ・国宝堂内には、鎌倉時代の木造菩薩立像、南北朝時代の木造菩薩坐像・木造菩薩立像等が保管されているが、湿気により傷みが進んでいる。保存処理や保管場所についての対応が早急に必要であると思われる。 ・収蔵庫には、木造太郎天立像・二童子立像、鬼会面や長安寺太鼓などが収められている。銅板法華経もガラスケース内に４枚展示されており、残りは木製の棚の中に一括して収蔵されている。 ・虚空蔵岩屋は、平成26年度の調査において、本来の参道跡と考えられる南側の谷筋を確認した。 ・峯坊では、各月毎に地区の方で御堂に集まり、管理を行っているということである。また、御堂の老朽化に伴い、建て直す予定ということである。			
寺院史概略	・大治五年（1130）に造立された太郎天童の胎内には、「屋山太郎惣大行事」の墨書が残る。この惣大行事の置かれた寺こそ六郷山の中心寺院であり、安貞二年（1228）の目録に「惣山」と記載される要因と思われる。その後、保延七年（1141）の銅板法華経の埋納、久安六年（1150）には大梵鐘の鋳造が行われ、惣山としてふさわしい整備が進められたと思われる。 ・寿永二年（1183）に屋山は緒方惟栄によって焼失し12年間も無住となる。この荒廃した屋山に建久五年（1194）に入った応仁は、「惣山」と「寺院」としての復興をめざす。しかし、六郷山の本寺である天台無動寺の座主である慈円は、新たに執行職を創設し延暦寺支配の再編を進める。初代執行となった円豪は、両子山に入り六郷山をまとめる。 ・円豪は鎌倉将軍家の祈祷のために安貞二年（1228）に『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』を作成するが、これにより六郷山は正式に関東祈祷所として認められる。目録に屋山は、「惣山」「屋山寺　本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊云々」と記載される。 ・屋山の応仁は、寛元二年（1244）に院主職を六郷山執行の快円に譲っている。これによって屋山は、両子山とともに執行の中心寺院となる。 ・建武四年（1337）の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」には、「屋山　限東田原路　限西明神前道向神護石　限南鳴石　限北折花」と記載される。 ・永享九年（1437）に大友氏の一族である吉弘綱重は、屋山の私領である加礼川・長岩屋の支配を確立する。吉弘綱重の弟豪慶、子息円仲は六郷山執行となっており、15世紀中頃には屋山・両子山はその傘下となる。 ・16世紀後半の吉弘鎮信・統幸は、屋山の麓である筧城に居住し、自ら六郷山の執行や権別当職に就いて六郷山を支配する。その後、屋山の山頂に山城を築くことになる。			

寺院現況及び変更点

〈Ａ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・鳥居とその前面に寄進した際の記念碑が位置している。（写真№.１）鳥居は、天保九年（1838）四月に豪源の代に大庄屋河野所助などによって造立されたもので、神額には「山王宮・太郎天童・六所宮」と記される。
・鳥居の周辺には、宝塔の笠部材・相輪（写真№.２）や板碑型五輪塔（写真№.３）が位置している。

〈Ｂ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・鳥居より延びる直線的な参道跡であり、タテ道と呼ばれている。（写真№.４）

〈Ｃ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・産屋跡と呼ばれている。本来は参道に面していたが、昭和20年代に参道から少し入った現在の位置に建て直している。産小屋として使用されたのは、昭和36年が最後である。建物は平成３年の台風によって倒壊している（写真№.５）また、周辺に石祠２基と石祠の笠部材を１点確認した

〈Ｄ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・奥ノ坊跡であり、現在は小規模な竹林となっている。（写真№.６）

〈Ｅ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・センズ坊跡（センズ―）と呼ばれている。（写真№.７）このセンズ坊跡から一段下がった地点で、一石五輪塔５基、板碑２基が一ヶ所に集積されている。（写真№.８）

〈Ｆ地点〉（図版②：境内地図面）
・引寺跡である。その規模は、南北約20ｍ×東西約30ｍ程の平坦面で、石垣によって構成されている。（写真№.９）宝篋印塔の基礎部材が１点残されており、戦国期の作とされている。（写真№10）

〈Ｇ・Ｈ地点〉（図版②：境内地図面）
・中ノ坊（Ｇ）及び両子坊（Ｈ）の坊跡地で、現在は民家となっている。（写真№11.12）周辺において、目立った石造物等は確認できなかった。

〈Ｉ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・参道（Ｃ）と不浄道（Ｊ）が交差する地点の北側段上において、板碑型墓碑７基と小型の板碑型五輪塔１基が存在している。（写真№13）この板碑群は、オト様板碑群と呼ばれている。

〈Ｊ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・参道（Ｃ）を横切るように不浄道と呼ばれる道が通っている。以前はこの不浄道が境内との境とされていたということである。（写真№14）

〈Ｋ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・五輪塔２基、石祠１基を確認したが、銘文などは確認できず、時期についても不明である。

〈Ｌ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・谷ノ坊跡であり、石祠１基と五輪塔群を２ヶ所、同時に五輪塔部材が散乱している状況が確認された。（写真№15.16）倒木や雑草が多く、石造物の位置などの確認も難しい状況である。

〈Ｍ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・Ａ地点の鳥居の北側に石造神像が一体存在している。

〈Ｎ・Ｏ地点〉（図版②：境内地図面）
・Ｎ地点は長安寺駐車場の南側であり、修行石（写真№17）・板碑（墨書あり）・板碑型五輪塔・石祠が位置している。（写真№18）このＮ地点の北側に隣接するＯ地点が、北ノ坊跡である。（写真№19）北ノ坊跡は、約20ｍ×20ｍ程の平坦面を有しているが、石造物等はみられない。

〈Ｐ地点〉（図版②：境内地図面参照）
・平成14年に建立された護摩堂が位置する。その北西側には、石祠が１基存在している。

〈Ｑ地点〉（図版②：境内地図面）
・県指定である長安寺国東塔（写真№20）が位置している。

〈Ｒ地点〉（図版②：境内地図面）
・六所権現社及び拝殿（写真№21.22）を中心に石祠７基、水盤、不動像、石幢基礎部と見られる石材などが集中している。まず、拝殿東側に石祠が３基、六所権現社の西側隅に石祠２基と不動像、笠部材が１点置かれている。さらに、その北側においてやや大型の石祠が１基存在している。また、水盤と石幢基礎部材については、拝殿の南側に置かれている。

〈S地点〉（図版②：境内地図面）
・六所権現社から一段下がった平坦面上において発掘調査により、講堂跡が確認されている。講堂について『六郷山年代記』には、建久七年（1196）の大友能直による権現社七堂寄進、明応六年（1497）講堂棟上、寛文二年（1662）の大講堂造立、寛延元年（1748）の大講堂造立と記載されている。また、『天明年中六郷山寺院名簿』（1781～1789）には、「講堂は五間四面で本尊は薬師脇侍は観世音なり」とみえる。江戸期に焼失した講堂は、明治18年に現在の収蔵庫の場所に再建されるが、大正12年に白蟻の害で倒壊している。（写真№23）
・講堂跡から南側付近において五輪塔残欠（火・水・地輪）と石幢の幢身部材のような六角形の部材が１基存在している。

〈T地点〉（図版②：境内地図面）
・本堂から六所権現社へ続く石段の参道周辺で、一石五輪塔を含む五輪塔群が１ヶ所存在している。（写真№24）また、石祠の笠部材が１点存在している。

〈U地点〉（図版②：境内地図面）
・本堂庫裡（写真№25）を中心に、西側に鐘楼（写真№38）、北側に宝篋印塔・無縫塔・宝塔・一石五輪塔・板碑・墓碑（写真№39）が存在している。東側には、石造物・石祠・板碑などが集中している。（写真№40）また、参道沿いには仁王像が合計４体配されている。（写真№41.42）

〈V地点〉（図版②：境内地図面参照）
・護摩堂から本堂の裏を通る道があり、その道をさらに南に向かって移動すると大池が存在しており、その大池の北側斜面地において石祠が２基存在している。

〈長安寺坊跡〉（図版①：詳細位置図参照）
・長安寺より南側に下った加礼川の谷に坊跡地が展開している。それらは、虚空蔵岩屋（現三嶋神社）・峯坊・常泉坊（道脇寺）・西坊・下ノ坊・猪窟坊であるが、常泉坊については、「道脇寺」の項目にて別途報告する
・道脇寺に残された永徳二年（1382）の「屋山寺供料免田注文案」には、加礼川に虚空蔵岩屋・峯坊・常泉坊・西坊が位置していたと記載される。また、文明年間の『加礼河常泉坊領山野四至境注文』には、常泉坊の領域が記載されているが、この坊域内には猪窟坊・下ノ坊の推定地が含まれている。よって、猪窟坊・下ノ坊は、常泉坊より室町時代後期から近世にかけて独立したと考えられる。

◎虚空蔵岩屋（三嶋社）
・寛元二年（1244）とされる『屋山寺院主応仁置文案』に虚空蔵岩屋との記載がみられる。
・虚空蔵岩屋へは、新田集落より背後の山へと向かう里道から石段が存在しており、明治41年銘の鳥居と五輪塔及び近世墓地（河野氏墓地？）が立地している。（写真№64）岩屋は三嶋社であり、拝殿（写真№65）と岩屋内に本殿（写真№66）が残る。
・岩屋内の本殿及び小堂には、御神体とされる銅製御幣や市指定有形文化財である虚空蔵菩薩坐像が安置されていた。虚空蔵菩薩坐像は、榧材の一木造で大分県立歴史博物館に保管中である。
・小龕に安置されていた木造弘法大師坐像は、昭和59年に並石ダム上流の相蓮山観雲堂に移動している。
・岩屋の南側には谷筋が伸びており、踏査を行った。その結果、谷部の中央部から五輪塔部材の残欠（写真№67）を多量に確認することができた。本来はこの南側の平野部（並石ダムの堰堤下付近）から北の岩屋へと続く直線的な谷筋が参道だった可能性が考えられる。

◎峯坊
・小堂（写真№68）が残されているが、この堂は老朽化により近年建替える予定である。堂内には室町時代の作とされる木造聖観音坐像（写真№69）が安置されている。御堂の裏側には、五輪塔群が存在している。（写真№70）また、旧参道跡には、地蔵像や一石五輪塔が確認できる。（写真№71）

◎下ノ坊
・道脇寺下の中村集落内に「シタノボウ」という屋号を持つ家があり、その周囲が比定地とされている。かつては、御堂が存在していたということである。その他、県道の傍らにハカショ（墓所）と呼ばれる場所に無縫塔が１基残されている。無縫塔には、「伝空上人　覚位」「念八月」と刻まれており、先祖祭りの会場でもある。無縫塔の周辺には、中世の一石五輪塔や五輪塔部材などが確認できる。（写真№72）

◎猪窟坊
・佐屋の元集落の中央に「イノクボウ」の屋号をもつ家があり、その周辺が比定地と考えられる。（写真№73）この猪窟坊の比定地正面の谷部には、大坪と呼ばれる以前鬼会を行っていた場所があり、嘉永五年（1852）建立の石灯篭などが残されている。（写真№74）

◎西ノ坊

・佐屋の元集落の対岸となる庵の迫集落の周辺が比定地とされている。（写真№75）庵の迫集落から背後の朝平神社へ向かう参道入り口付近には、鎌倉末～南北朝のものを含む五輪塔・板碑が存在している。（写真№76）また、集落から谷を挟んだ向かいの畑には、「ボンヤシキ」「ヤゴロウ」の地名が残る。「ヤゴロウ」には、南北朝期以前にさかのぼる板碑が倒れている。（写真№77）

・庵の迫集落の対岸、谷の中央部には御堂（写真№79）があり、手前には室町時代の宝篋印塔残欠が存在している。（写真№78）御堂内には室町時代後半の木造薬師如来坐像（写真№80）やかなり古い焼仏などが安置されている。（写真№81）

・御堂の北側には、竹林が存在しており、段々畑のように平坦面が形成されている。この平坦面上段に室町～戦国期の五輪塔群が存在している。（写真№82）五輪塔群の下段には、県指定有形文化財で正中二年（1325）銘の墨書を有する庵ノ迫板碑（連碑）と２基の板碑が位置している。（写真№83）

◎崇福寺

・都甲郵便局の西側隣接地が崇福寺と呼ばれており、長安寺住職より末寺であると聞き取れた。現在は無人となり荒廃している。入口には小堂があり石造の弘法大師立像が祀られる。（写真№84）

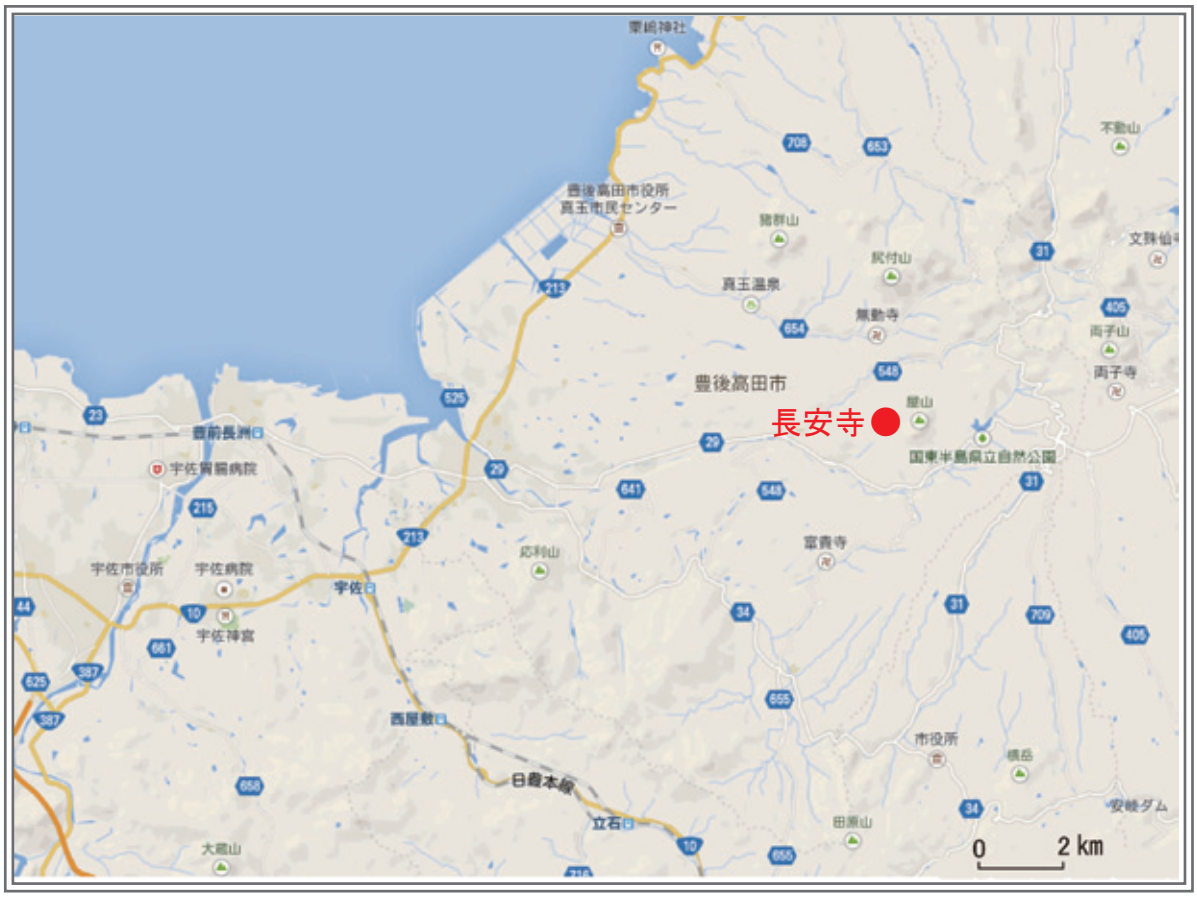
・長安寺本堂に安置される木造地蔵菩薩立像の足元に残る木造如来立像が、以前祀られていた寺である。（写真№33）

≪主要参考文献≫

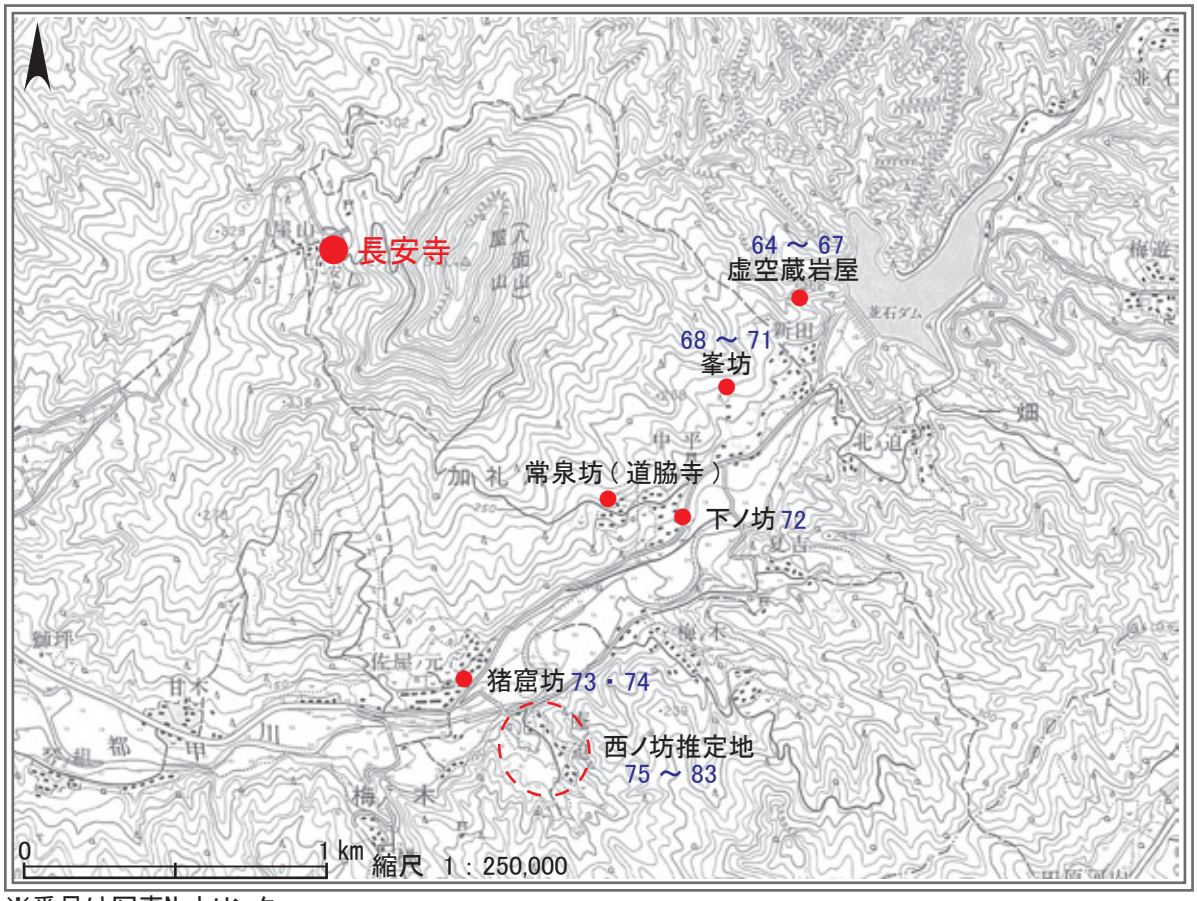
・『豊後国都甲荘の調査　本編』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 11 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1993
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』大分県立歴史博物館調査報告書第５集　大分県立歴史博物館　2001
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996

図版①　長安寺　位置図

市域位置図

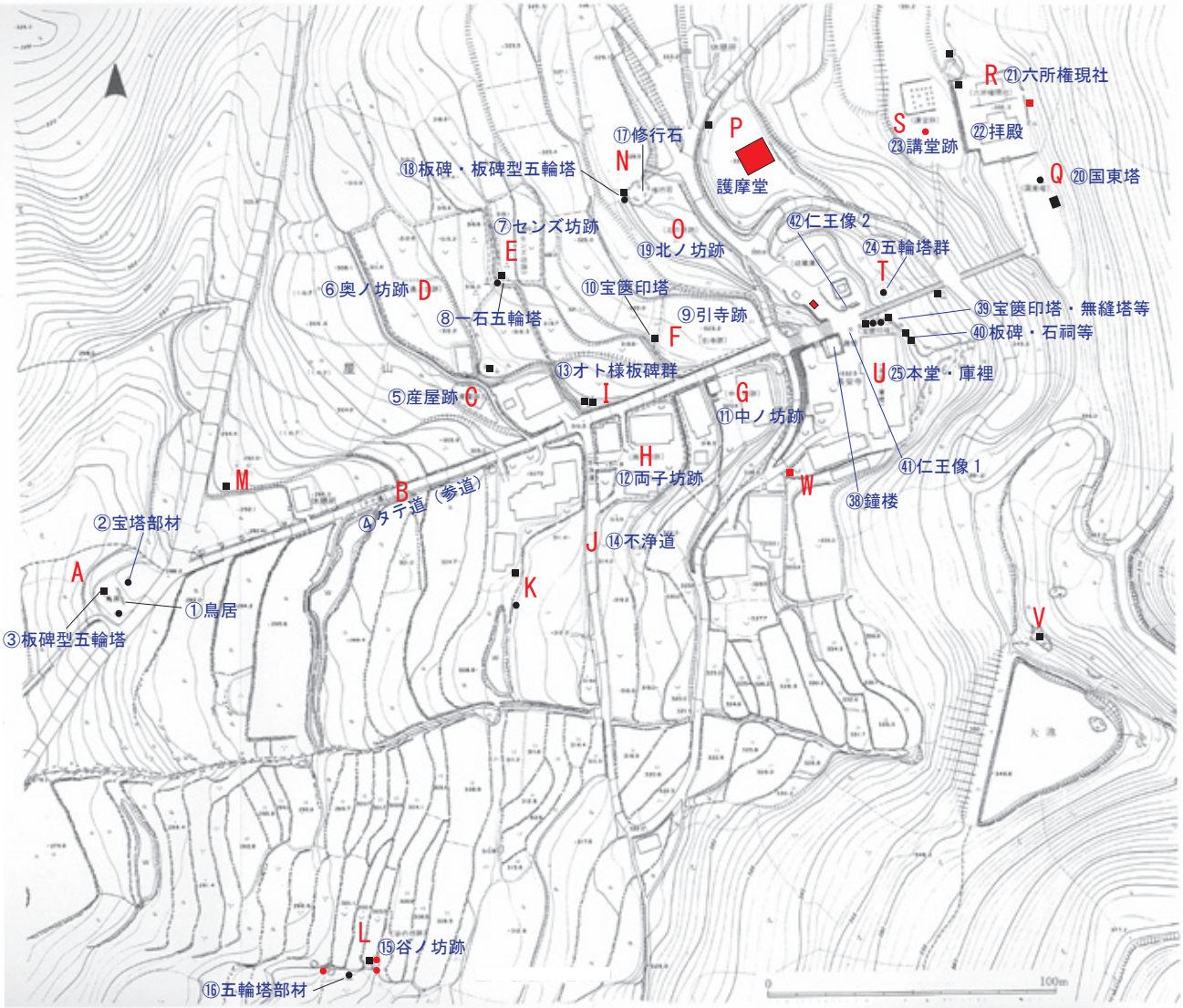


詳細位置図



※番号は写真No.とリンク

図版②　長安寺境内地図面



A…鳥居、板碑型五輪塔、石碑、宝塔笠部・相輪部
B…タテ道
C…産屋跡、石祠２基、石祠笠部材
D…奥ノ坊跡
E…センズ坊跡、一石五輪塔５基、板碑２基
F…引寺跡、宝篋印塔基礎１基
G…中ノ坊跡
H…両子坊跡
I…板碑型墓碑７基、板碑型五輪塔１基（オト様板碑群）
J…不浄道
K…石祠１基、五輪塔２基
L…谷ノ坊跡、石祠１基、
　五輪塔群２ヶ所、五輪塔残欠散乱
M…石造神像
N…修行石、板碑、板碑型五輪塔、石祠
O…北の坊跡
P…護摩堂、石祠
Q…国東塔
R…六所権現社、石祠７基、
　石幢基礎？、水盤、不動像
S…講堂跡，五輪塔残欠、幢身？１基
T…石段沿いに五輪塔群、一石五輪塔、石祠、石祠残欠
U…本堂・庫裡、鐘楼、宝篋印塔２基、無縫塔１基、
宝塔１基、一石五輪塔２基、五輪塔残欠１基、
板碑１基、石柱１、墓碑１基（以上は本堂北側）
・石像３体、石祠１基、宝珠のみ２個、板碑１基、
笠部材１基、木像？１体（以上は本堂東側）
V…石祠２基
W…石祠

■マーク…石祠、板碑型石造物、宝篋印塔など
●マーク…五輪塔、無縫塔など（●、■マークは平成25年度確認調査に伴う新規追加分）
※①～㊷は写真№にリンク。

文化財の現況・詳細（1）

1：鳥居・石碑　図版②参照：A地点／時期：天保９年

・天保九年（1838）四月の銘文が残る。また、この鳥居を寄進した際の記念石碑が存在している。
・石碑には「奉寄進鳥居」の銘が確認でき、「当山現住豪源代 大庄屋河野所助道達」などの願主や石工の銘などが四面に彫られている。

2：宝塔部材　図版②参照：A地点／時期：－

・銘文などは確認できず、時期は不明である。付近には、相輪部材が確認できる。

3：板碑型五輪塔　図版②参照：A地点／時期：－

・A地点の西側において４段に積み上げられた台座の上部に板碑型五輪塔が１基安置されている。

4：参道（タテ道）　図版②参照：B地点／時期：－

・約200mの参道であり、現在は坊跡などに民家が存在するため整備された道になっている。

5：産屋跡　図版②参照：C地点／時期：－

・不浄を避ける為に行われていたとされる産小屋の風習の名残りと考えられる。
・最後に使用されたのは昭和36年で建物は平成３年の台風で倒壊している

6：奥ノ坊跡　図版②参照：D地点／時期：－

・南北に延びる平坦面上に立地しており、建物跡や石造物などは見られない。

文化財の現況・詳細（2）

7：センズ坊跡　図版②参照：E地点／時期：戦国期？

・奥ノ坊跡と同様に、南北に延びる平坦面上に存在している。
・南西側へ一段下がった地点に戦国時代の作とされる石造物の集積がみられる。

8：センズ坊下段石造物　図版②参照：E地点／時期：戦国期？

・一石五輪塔５基、板碑２基が一ヶ所に集積されている。
・戦国期の作とされるが詳細は不明である。

9：引寺跡　図版②参照：F地点／時期：戦国期？

・引寺跡と呼ばれる。現在は、やや広い平坦面を有しており、跡地内に石塔などの部材が確認できる。

10：引寺跡　宝篋印塔基礎　図版②参照：F地点／時期：戦国期

・引寺跡地の西側端部において、宝篋印塔の基礎を１基確認した。周辺には、歪な形の石造物も確認できるが詳細は不明である。また、戦国期の作とされる。

11：中ノ坊跡　図版②参照：G地点／時期：－

・現在は民家になっている。

12：両子坊跡　図版②参照：H地点／時期：－

・現在は民家になっている。

13：オト様板碑群　図版②参照：I地点／時期：慶長15年

・板碑型墓碑７基及び小型の板碑型五輪塔１基があり、オト様板碑群と呼ばれている。板碑型墓碑の２基に、「慶長十五年（1610）二月八日　僧賢徳上座　松岳妙栄」・「慶長十五年（1610）二月八日　月心妙甫逆修」「妙永」「道安」の銘が残る。
・参道（タテ道）と不浄道の交わる地点に立地している。

15：谷ノ坊跡　図版②参照：L地点／時期：戦国期？

・現在、雑草や倒木などにより荒廃している。周辺には、五輪塔・板碑・石祠などが存在している。
・周辺に戦国期とされる五輪塔が存在しているため、戦国期には成立していたものと考えられる。

17：修行石　図版②参照：N地点／時期：－

・長安寺駐車場に隣接して修行石と呼ばれる巨石が存在している。時期などは不明であるが、石造物の集積や、南側に坊跡が存在していることから、その名残の可能性が考えられる。

14：不浄道　図版②参照：ｊ地点／時期：－

・参道を南北方向に横切る道で、不浄道と呼ばれる。
・以前は、この道から東側が境内であり、その境とされていた。
・不浄道を南に進むと、長安寺や坊集落の近世墓地を経て麓の加礼川へと至る。

16：谷ノ坊跡　五輪塔残欠　図版②参照：L地点／時期：室町～戦国期

・やや荒廃しており、石祠や五輪塔などが崩れ、散乱しているような状況である。
・五輪塔については、室町～戦国期の作とされる。

18：板碑、板碑型五輪塔　図版②参照：N地点／時期：－

・修行石の脇に、板碑（墨書あり）・板碑型五輪塔・石祠が集積されている。周辺の駐車場や墓苑の整備に伴い、集積されたものか、以前から位置していたものなのかは不明である。

19：北ノ坊跡

図版②参照：O地点／時期：－

・現在は、約20m×20m程の平坦面を有している。
・周辺の踏査を行ったが、石造物などは確認できない。

20：長安寺国東塔

図版②参照：Q地点／時期：鎌倉時代

・参道石段を登り終えた地点に位置しており、県指定有形文化財に指定されている。
・基礎は三重で、台座は反花のみで、相輪は後補である。総高は、3.47mであり、銘文はないが、鎌倉時代の作と考えられる。

21：六所権現社

図版②参照：R地点／時期：－

・長安寺境内の最も上段にある平坦面上に立地している。周辺には、近世の石祠などが点在している。

22：拝殿

図版②参照：R地点／時期：－

・石垣により形成された、一段高い平坦面上に立地している。水盤や石幢の台座と思われる部材などが確認できる。

23：講堂跡

図版②：S地点／時期：－

・講堂について「六郷山年代記」には、建久七年（1196）に大友能直による「権現社七堂寄進」や、明応六年（1497）に「屋山講堂棟上了」、寛延元年（1748）に「大講堂造立」などと記載されている。
・近年の発掘調査により、東西約12.3m×南北11.2mの基壇に、三間四方の桁行6.5m×梁行6.1mの規模の講堂であったことが確認されている。また、土師質土器小皿や坏が出土しており、近世の所産のものが主体を占める中で、15～16世紀のものが少量含まれるといった様相を呈している。

24：T地点五輪塔群

図版②参照：T地点／時期：戦国期

・六所権現へ続く参道左手側に、小型の一石五輪塔や五輪塔が少数確認できる。
・室町～戦国期の作とされている。

25：長安寺本堂・庫裡　図版②参照：U地点／時期：－

・本堂内には、本尊の木造千手観音立像・木造阿弥陀如来坐像・木造薬師如来坐像等が安置される。
・本堂北側や東側に多数の石造物が安置されている。

26：木造阿弥陀如来坐像　本堂内／時期：鎌倉時代後期

・檜材の寄木造である。
・全体に端正で引締まった像容を示している。

27：木造薬師如来坐像　本堂内／時期：鎌倉時代

・「豊後くにさき長安寺」では、江戸時代作の釈迦如来として報告されているが、平成27年度の調査で訂正を行った。厨子は近世である。
・「豊後くにさき長安寺」　九州歴史資料館　1988

28：木造千手観音立像　本堂内／時期：江戸時代初期

・長安寺の本尊である。
・檜材の寄木造である。

29：木造天台大師坐像　本堂内／時期：文政13年

・坐像や台座に墨書は無いが、木造伝教大師坐像と同一時期の作と思われる。

30：木造伝教大師坐像　本堂内／時期：文政13年

・像の台座の裏書に「文政十三歳」（1830）の墨書が残る。

31：墨書　本堂内／時期：文政13年

・像の台座の裏書に「文政十三歳（1830）庚寅八月吉日　仏師夷村　法橋國良作」の墨書が残る。

32：木造地蔵菩薩立像　本堂内／時期：江戸時代初期

・本尊である千手観音立像と近い時期の造立と考えられる。

33：木造如来立像　本堂内／時期：明治時代

・木造地蔵菩薩立像の足元に13躯が置かれている。
・背面に残る墨書から、長安寺の末寺である崇福寺に明治時代に祀られたことが確認された。

34：木造如来坐像　本堂内／時期：17～18世紀

・本堂内の須弥壇ではなく、隣接する間に安置されている。
・傷みがはげしい。

35：薬師如来坐像・日光月光立像・十二神将像　本堂内／時期：江戸時代

・16世紀の作となる可能性が残る。

36：銅製華鬘　本堂内／時期：江戸時代

・本堂内に三枚が確認できる。
・三枚のいずれにも「屋山長安寺　施主豪圓法印」の刻銘が残る。

37：銅製双盤　本堂内／時期：江戸時代

・「出羽大掾宗春作」との刻銘が残る。

38：鐘楼　図版②参照：U地点／時期：－

・本堂の西側に立地しており、基礎などをみる限り、近年整備されたものと考えられる。

39：本堂北側石造物　図版②参照：U地点／時期：戦国時代～

・宝篋印塔、無縫塔、宝塔など多くの石造物が集積されている。
・左側の吉弘鎮信に関する宝篋印塔は、市指定有形文化財で、「宗伽公　天正十二年（1584）十一月十二日」の銘が残る。吉弘鎮信は天正六年（1578）に打死しており、その七回忌の供養塔である。
・右側の宝篋印塔は、長安寺中興の豪円大和尚のもので、「元禄十三庚辰天（1700）四月三日寿六十六歳寂」云々の刻銘がみられる。

40：本堂東側石造物　図版②参照：U地点／時期：－

・板碑や石祠等が集中して安置されている。詳細な時期などは不明である。

41：仁王像①　図版②参照：U地点／時期：正徳５年か

・参道右手側に北側を向く形で仁王像が配されている。
・『六郷山年代記』には、正徳五年（1715）に仁王造立と記載されており、その仁王と考えられる。

42：仁王像②・国宝堂　図版②参照／時期：文政12年

・国宝堂の前面に位置している。石質は田染石である。髻は三山褐髻を呈する。阿形像は左手に金剛杵を持ち肩に構える。右手は腰で拳にする。吽形像は右手に肩付近で掌を前に開き、左手は腰で拳にする。上腕部には、力溜が刻出されている。田染石による仁王像の多くは天衣を有するが、その表現のない数少ない仁王像の一つである。(豊国の歴史考古学研究 渋谷忠章 2007)
・国宝堂内には、４躯の木造仏及び２躯の大師像が安置されているが、いずれも湿気によって傷みが進んでいる。保管場所や保存処理について早急な対応が必要と思われる。

43：木造菩薩立像　国宝堂内／時期：鎌倉時代

・檜材による寄木造である。
・保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。

44：木造菩薩立像　国宝堂内／時期：南北朝時代

・檜材による一木造である。
・保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。

45：木造菩薩坐像　国宝堂内／時期：南北朝時代

・湿気によって傷みが進んでいる。保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。
・檜材による寄木造である。

46：木造菩薩坐像　国宝堂内／時期：南北朝時代

・湿気によって傷みが進んでいる。保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。
・檜材による寄木造である。

47：木造慈覚大師像　国宝堂内／時期：江戸時代

・湿気によって傷みが進んでいる。保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。

48：木造弘法大師像　国宝堂内／時期：江戸時代

・湿気によって傷みが進んでいる。保管場所や保存処理について早急な対策が必要と思われる。
・曲彔や沓・瓶もみられる。

49：銅製逆修札　国宝堂内／時期：元和４年

・「葛川大々先達行満権大僧都法印豪澄逆修　元和四年（1618）八月吉日」の刻銘が残る。

51：喚鐘　国宝堂内／時期：享保９年

・「奉寄進　太郎天童　御宝前　加礼川住人　大力氏権大僧都　貴行院　右位趣進信大施主　享保九年甲辰天（1724）　八月十五日」の刻銘が残る。

53：太郎天・二童子像　収蔵庫内／時期：大治５年

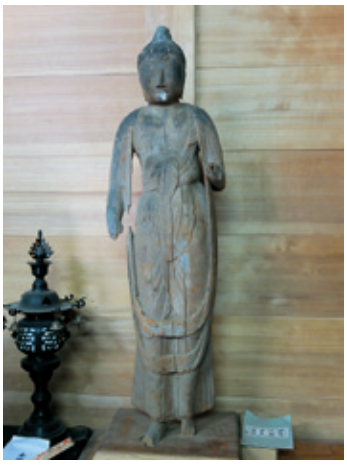
・明治初年の神仏分離が行われるまでは、六所権現社に祭神として祀られていた。
・三尊とも榧材の一木彫成像であるが、主尊の太郎天像は、髪を美豆良に結い、目尻の上がった鋭い眼光をしている。また、太郎天像の胎内には、墨書が残されており、大治五年（1130）に100名近い結縁者により造顕されたことが記されている。（国指定重要文化財に指定されている。）

50：銅製御幣　国宝堂内／時期：近世

・（左）「奉寄進　屋山七所権現御寶　前御幣一本　施主安藤半兵衛」の刻銘が残る。
・（右）「奉寄進　屋山大良天童御寶　前御幣一本　願主恵了院助力野田惣六」の刻銘が残る。

52：長安寺収蔵庫　図版③参照／時期：－

・現在、国指定重要文化財である太郎天立像や銅板法華経などが保管されている。



54：木造菩薩立像　収蔵庫内／時期：平安時代後期

・口元に白色系の塗布がみられる。その処理について対策が必要と思われる。
・檜材による一木造である。

55：銅製観音菩薩立像　収蔵庫内／時期：鎌倉時代

・鋳造で、総高は20.4cmである。

56：銅製誕生仏　収蔵庫内／時期：江戸時代

・鋳造である。

57：木造天台大師坐像　収蔵庫内／時期：文化11年

・坐像の底面に墨書が残されている。

58：墨書　収蔵庫内／時期：文化11年

・坐像の底面に「文化拾一年（1814）　甲戌四月吉日　豊後國東夷村　仏師　法橋寄柏作　同寄柏子　板井貞四郎國芳」の墨書が残る。

59：木造伝教大師坐像　収蔵庫内／時期：文化11年

・坐像や台座に墨書は見られないが、木造天台大師坐像と同一時期の作と考えられる。

60：長安寺太鼓　収蔵庫内／時期：近世初頭？

・自然木の形状をそのまま輪切りにし、内部を刳り貫いている。県指定有形文化財である。
・内部には、「文永三年（1266）」・「寛文四年（1664）」・「正徳四年（1714）」の墨書があるが、文永の年紀は後世に書かれたと考えられている。しかし、少なくとも近世初頭には作られていたものと考えられる。
・「六郷山年代記」には、文永三年に「当山太鼓初メ出来」、寛文五年に「太鼓ハリカヘ」、正徳二年に「当山太鼓下市村為左衛門ハリカヘ」と記載されるが、太鼓内部の墨書とは相違している。

61：鬼会面・神楽面　収蔵庫内／時期：江戸時代後期

・鬼会面五面、神楽面七面が保管されている。他の寺院に比べ、保管されている面が多く、当寺院が六郷満山において中心的な役割を果たしていたことを窺える資料である。
・すべて桐材である。

62：護摩堂　図版①参照／時期：－

・近年建てられた御堂で、不動明王像を安置する。

63：木造不動三尊像　護摩堂内／時期：寛政５年

・寛政五年（1793）の法印豪辯の代に夷村の板井甚蔵によって製作されたものである。施主に長岩谷邑福田権右衛門とみえる。

64：虚空蔵岩屋入口　図版①参照／時期：明治？

・新田地区の集落から背後の山へ向かう途中に虚空蔵岩屋への石段が存在している。
・石段上には、明治41年銘の鳥居が位置する。
・明治41年頃に虚空蔵岩屋への参道の改変があったものと推察される。

65：虚空蔵岩屋　拝殿　図版①参照／時期：－

・岩屋の手前に石垣により形成された平坦面が存在している。この平坦面上に拝殿が立地している。また、拝殿手前には石灯篭の残欠と思われる部材が集積されている。
・小龕に安置されていた木造弘法大師坐像は、昭和59年に並石ダム上流の相蓮山観雲堂に移動している。
・本来はこの拝殿前より加礼川の谷へと直線的に延びる参道が位置していたと推測される。

66：岩屋（本殿）　図版①参照／時期：寛元２年以前

・寛元二年（1244）とされる『屋山寺院主応仁置文案』に虚空蔵岩屋との記載がみられる。
・岩屋内には、本殿・小堂があり御神体とされる銅製御幣や市指定有形文化財の虚空蔵菩薩坐像が安置されていた。虚空蔵菩薩坐像は、榧材の一木造で大分県立歴史博物館に保管中である。
・岩屋右手側には文政八年銘が残る石灯篭の残欠が位置している。

67：五輪塔残欠　図版①参照／時期：室町～戦国

・岩屋から南側には、緩い谷筋が延びており、この谷筋状に五輪塔の残欠を確認した。時期などは不明であるが、本来はこの谷筋が参道であった可能性が高いと考えられる。

68：峯坊　図版①参照／時期：永徳２年

・永徳二年（1382）の「屋山供料免田注文案」に「峯坊」と記載されている。
・堂の周囲には、明治22年の地籍図に４軒程の屋敷地がみられる。
・堂は近隣住民の方々によって管理されており、近年建替えの予定があるという。

69：木造聖観音坐像　図版①参照／時期：室町時代前期

・堂内に木造聖観音坐像が１躯安置されている。室町前期頃の像容を示すとされる。

70：峯坊跡五輪塔群　図版①参照／時期：室町～戦国期

・峯坊の堂より北側に20m程移動した地点に10基程の五輪塔及び近世墓碑が残されている。
・五輪塔は、室町～戦国時代にかけての作とされる。また、扁平礫が長方形状に集積されており、中世墓の様相を呈している。

71：旧参道跡　石造物　図版①参照／時期：近世？

・峯坊跡の旧参道が残されており、五輪塔などの石造物が確認できる。

72：下ノ坊墓所　図版①参照／時期：戦国末～近世初頭

・下ノ坊の比定地に、樹木で囲まれた小さな石積みがあり、その中央に無縫塔が位置する。
・無縫塔には、「伝空上人　覚位」と刻まれている。
・周辺に戦国期末か近世初頭と考えられる一石五輪塔や五輪塔部材が存在している。

73：猪窟坊比定地

図版①参照／時期：－

・現在、石掛英彦氏宅が「イノクボウ」の屋号を有しており、猪窟坊の比定地とされている。
・周辺に石造物などはみられない。

74：鬼会跡地

図版①参照／時期：－

・猪窟坊の正面谷部に、以前鬼会が行われていた場所が存在している。
・石灯篭が位置している地点であり、昭和35年頃まで旧正月15日に佐屋の元・庵の迫・百塚の各集落の人々によって鬼会が行われていたという。

75：西ノ坊跡（庵の迫集落）

図版①参照

・庵の迫集落周辺には、「ボンヤシキ」の地名や正中二年銘の墨書を持つ連碑、南北朝期以前にさかのぼる板碑等が存在しており、西ノ坊として考えられている。

76：庵の迫板碑・五輪塔

図版①参照　時期；鎌倉末～南北朝期

・集落から背後の朝平神社へと向かう参道入り口付近に五輪塔・板碑が存在しており、鎌倉時代末頃～南北朝時代と考えられている。

77：ヤゴロウ板碑

図版①参照／時期：南北朝期以前

・庵の迫集落の「ヤゴロウ」と呼ばれる畑の一角に南北朝時代以前までさかのぼると考えられる大型の板碑が倒れた形で置かれている。

78：宝篋印塔残欠

図版①参照／時期：室町時代

・庵の迫の御堂の境内に宝篋印塔の残欠が確認できる。
・室町時代の作とされる。

79：庵の迫の御堂　図版①参照／時期：－

・トタン葺きの小堂で、荒廃がはげしい。
・堂内には、木造阿弥陀如来坐像・木造尊名不詳坐像・木造薬師如来坐像や三体の地蔵が陽刻された凝灰岩及び位牌などが安置されている。

81：木造尊称不詳坐像　庵の迫の御堂内／時期：－

・須弥壇の右端に安置される。
・『豊後國都甲荘の調査　資料編』では、「平安仏カ」と報告されている。

83：庵ノ迫の板碑　図版①参照／時期：正中２年

・現在、県指定有形文化財に指定されている。連碑には、墨書で胎蔵界大日・文珠・普賢の種子と正中二年(1325)の紀年銘が残されている。
・聞き取り調査により、圃場整備に関連して一度集落へ移動させたということである。
・連碑の左側に２基の板碑が立地している。

80：木造薬師如来坐像　庵の迫の御堂内／時期：室町後半

・須弥壇の左側、厨子内に安置される。光背は外れている。
・室町時代後半の作とされる。

82：庵の迫　五輪塔群　図版①参照／時期：室町～戦国期

・庵ノ迫板碑の北側の斜面に五輪塔が10基程安置されている。倒壊しているものや、枯葉に埋没しているものが目立つ。
・室町～戦国時代にかけての作とされる。

84：崇福寺　図版①参照／時期：－

・長安寺住職より末寺であると聞き取れたが、現在は無人となり荒廃している。
・入口の小堂には、石造弘法大師立像が安置される。
・長安寺本堂に安置される木造地蔵菩薩立像の足元に置かれた木造如来立像が以前祀られていた。

寺院名	道脇寺（常泉坊）	寺院番号	⑭
所在地	大字加礼川		
居住状態	無住		

指定文化財	各種文化財員数	種別	個数
		木造建築	
		礎石跡等	
		石造物	3
		仏像	1
		美術品	
		古文書	1
		その他	

特筆すべき文化財	
・木造聖観音像（写真№2）	・道脇寺中世墓地（写真№3）
・応仁供養塔（写真№4）	・道脇寺墓地五輪塔群（写真№5）
・道脇寺文書	

寺院管理状況

〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉

・現在観音堂の周辺は、以前まで周辺の管理をされていた阿部豪正氏のご家族が掃除などを引き続き行っているということである。
・聞き取り調査によれば、現観音堂は昭和56年に阿部豪正氏を中心に再建されており、阿部氏自身も天台宗僧侶であったということである。
・観音堂の中には、観音像や近世（嘉永三年、弘化三年、文化七年等）の位牌が安置されている。
・道脇寺墓地周辺において、雑草や倒木が目立ち、やや荒廃している印象を受ける。

寺院史概略

・道脇寺は、長安寺の坊の一つである常泉坊に相当する。建久五年（1194）に屋山寺（長安寺）を再建するために入った応仁の隠居所となったとされる。堂の背後には、道脇寺墓地が位置しており応仁の供養塔が残されている。この道脇寺には、中世文書12通が伝えられており、現在は大分県立歴史博物館に道脇寺文書として保管されている。
・寛元二年（1244）と推定されている「屋山寺院主応仁置文案」には、当寺が所在する加礼川地区に長安寺や虚空蔵岩屋を維持するための料田が存在したと記載されている。
・永徳二年（1382）の「屋山寺供料免田注文案」には、加礼川に虚空蔵岩屋・峯坊・常泉坊・西坊が位置していたと記載される。
・文明年間の『加礼河常泉坊領山野四至境注文』によって常泉坊の領域が判明しており、集落や耕地、それに山野が含まれていたことがわかっている。この坊域内には、猪窟坊・下ノ坊の推定地が含まれており、常泉坊より室町時代後期から近世にかけて独立したと考えられる。
・観音堂須弥壇に残る文政十年（1827）の修札には「道鏡寺」、明治十四年（1881）の位牌には「道教寺」と記載される。現在の道脇寺となった時期は明治14年以降である。

寺院現況及び変更点

〈Ⅰ区（観音堂周辺）〉（図版②：道脇寺周辺実測図参照）

・観音堂（写真№１）の手前には、石碑１基（銘文等は劣化により確認できない）、石碑等の台座と思われる部材１基、手水石１基、一石五輪塔５基が集積されている。また、その周辺に礫が数点確認することができる。
・観音堂内には、本尊である観音像（写真№２）や近世段階の位牌や修札などが安置されている。

〈Ⅱ区（道脇寺墓地）〉（図版②、③：道脇寺周辺実測図・道脇寺墓地Ⅱ区拡大図参照）

・観音堂から北西側に、約20m弱移動した斜面地において、龕と思われる部材が１点確認できる。その位置や状況から、本来は現在の道脇寺墓地周辺に存在していたものが、何らかの理由で倒壊し、斜面を落下したものと思われる。
・観音堂から林道を30m程登った右手側に道脇寺墓地が立地している。（写真№３）現状で確認できる石造物は、無縫塔２基・板碑型墓碑１基・完形の五輪塔11基・一石五輪塔１基・台座部材１基・石造仏１基である。（写真№３）その他に、部材を一部欠いている五輪塔８基がみられる。
・道脇寺墓地の五輪塔は、空風輪と火輪の接合部や水輪と地輪の接合部などをセメントで接合しているものが多数みられる。また、墓地の中心部に中世墓と思われる扁平な礫の集石が確認できる。範囲は約２m×２mの正方形で、現状は枯葉等による埋没がみられる。同時に、この中世墓の上に、五輪塔や石造仏が置かれている。（写真№５）
・墓地の南側の１段下がった平坦面上において、空風輪・火輪の部材を１基確認した。本来は北側の墓地群の中に立地していたものが、落下したものと考えられる。
・墓地から東側へ続く平坦面上には、近代～現代の墓地が形成されており、墓石の台座のみが残されているものなども確認できる。同時に、その周辺で墓石の破片と思われる石材が散乱していることから、近年において、墓地の移動、もしくは新たな墓石の設置が行われた可能性が高い。

〈阿部氏墓地歴代住職墓碑〉

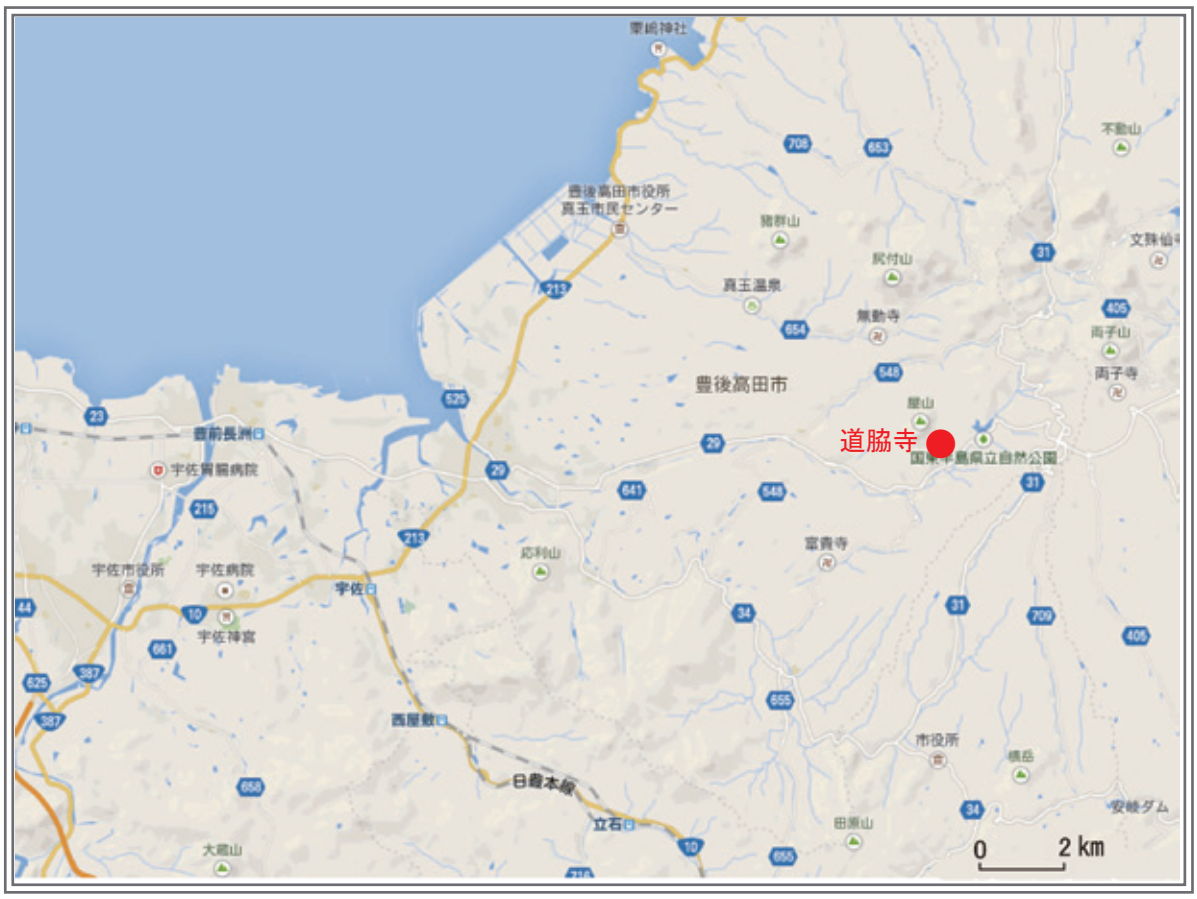
・道脇寺から長安寺へ向う古道沿いに、阿部家の墓地が位置しており、その中に無縫塔が３基（写真№６）存在している。無縫塔は、天明五年（1785）・嘉永三年（1850）・明治十四年（1881）であり、観音堂内に安置されている位牌にも同一のものがある。

≪主要参考文献≫

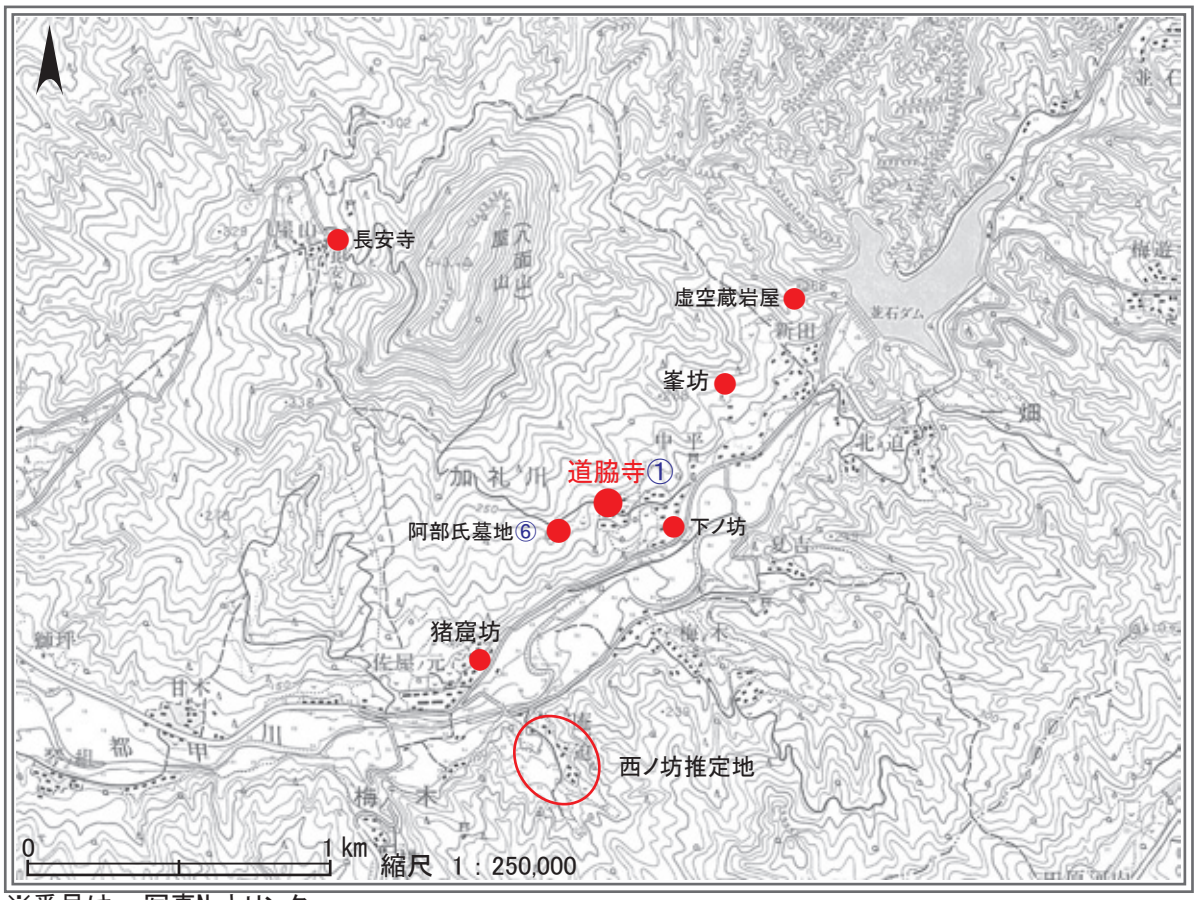
・『豊後国都甲荘の調査　本編』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 11 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 19 集　　1997
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要ー豊後高田市・真玉町・香々地町の部ー』 大分県文化財調査報告書　第 37 輯

図版①　道脇寺　位置図

市域位置図

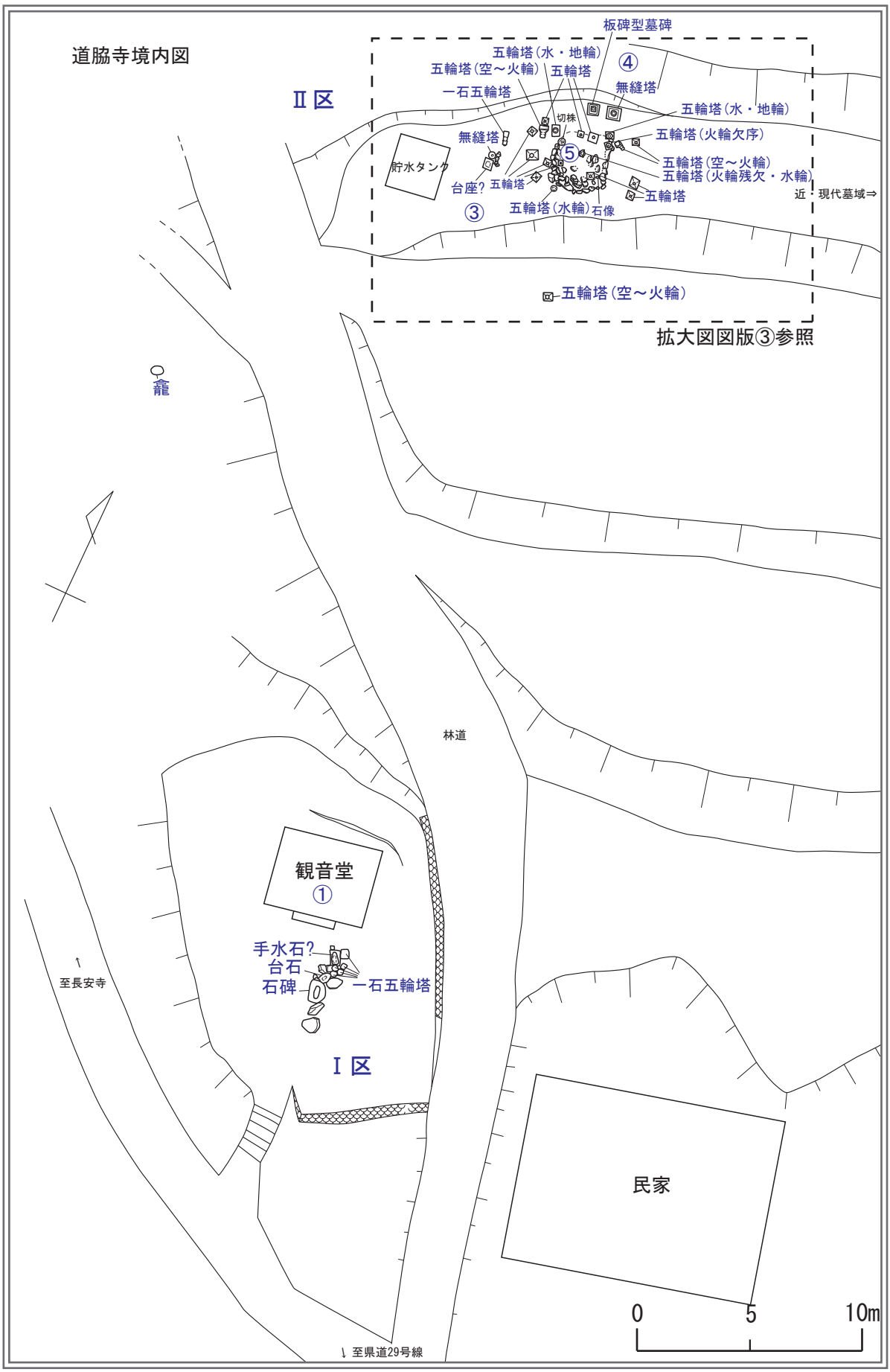


詳細位置図



※番号は、 写真№とリンク

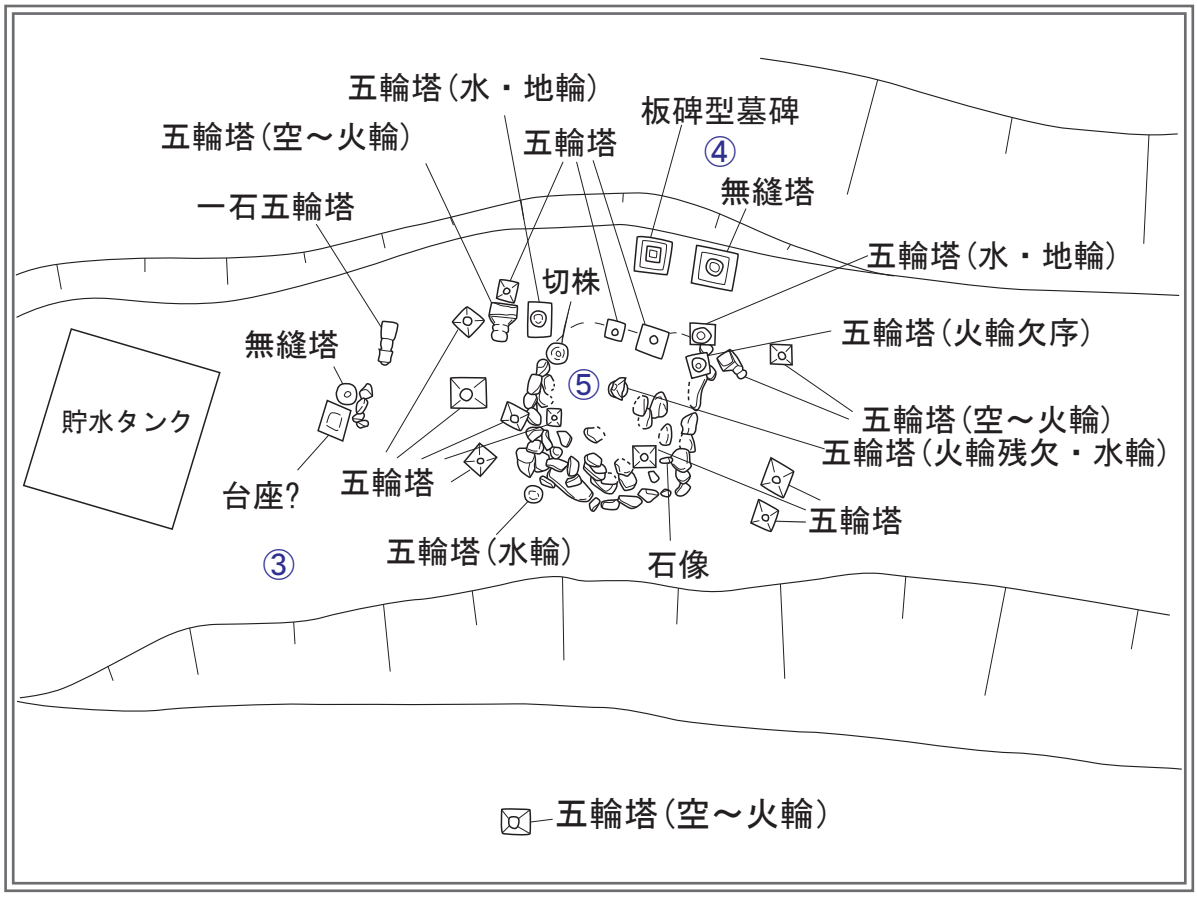
図版②　道脇寺　周辺実測図



※番号は写真No.とリンク

図版③　道脇寺墓地Ⅱ区拡大図

Ⅱ区拡大図



※番号は写真№とリンク

1：道脇寺観音堂　図版②：Ⅰ区／時期：昭和56年

・現在の観音堂は、昭和56年に阿部豪正氏や近隣住民の方々により再建されたものである。
・堂の手前には、石造物などが集積されている。

2：木造観音菩薩坐像　堂内／時期：室町初期

・道脇寺の本尊であり、室町時代初期の作とされる。

3：道脇寺墓地　図版②、③：Ⅱ区／時期：中世以降？

・無縫塔２基、板碑型墓碑１基、完形の五輪塔11基、一石五輪塔１基、台座部材が１基、石造仏１基がみられる。また、墓地の西側には、五輪塔等が集積されている。
・写真左手の無縫塔には、「天正五丁丑天（1577）大法師豪仁大徳霊」と記されている。
・墓地の中央には、礫を組み合わせた中世墓と思われる遺構が確認できる。

4：無縫塔・板碑型墓碑　図版②、③：Ⅱ区／時期：近世

・無縫塔には、「宝治元丁未年 大僧都大阿闍梨法印応仁大和尚尊位 九月八日寂□ 當四百三拾年忌　拝立□信」とある。
・板碑型墓碑には、「宝治元丁未夫 當院開山阿闍梨法印応仁和尚位 九月初八日」とある。
・宝治元年（1247）から430年後の延宝五年（1677）に屋山仏持院初代である応仁の供養の為に造立されたものと考えられる。

5：道脇寺墓地（中世墓）　図版②、③：Ⅱ区／時期：中世？

・墓地中央に横2.5m、奥行1.8m、高さ約0.5m程の方形壇状に扁平の角礫を積み上げた墓が存在している。形状からみるに、中世墓の可能性が考えられる。
・現状では、この墓の上に五輪塔や石造仏などが置かれている。

6：阿部氏墓地　図版①参照／時期：近世

・道脇寺から長安寺へ向かう古道沿いの阿部氏の墓域の中に３基の無縫塔が立地している。
・写真左より、「天明五乙巳天 権律師良覚」「嘉永三戊天 権律師専乗坊大徳」「明治十四天 権律師□□房大和尚」の無縫塔である。
・観音堂内には無縫塔と同一の位牌が残されており、道脇寺と阿部氏の関係の深さが窺える。

寺院名	旧妙覚寺		寺院番号	⑮
所在地	大字払田			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財			木造建築	1
			礎石跡等	
			石造物	4
			仏像	
			美術品	
			古文書	
			その他	1
特筆すべき文化財	・土塁、掘状遺構（写真№1.2）	・笠塔婆（写真№7）		
	・板碑（写真№8）	・宝塔（写真№9）		
	・薬師堂（写真№26）	・異形国東塔（写真№33）		
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・平成25年度の六郷満山現況確認調査において、周辺住民の方に聞き取り調査を行った。発掘調査が実施された地点において、戦後の耕作中に大型の礫がよく出土したということである。妙覚寺の礎石や基壇などの石材の可能性も考えられるが、推測の域は出ない。 ・旧妙覚寺跡地西側の民家が集中している地点において、石造物（五輪塔残欠等）が確認できるが、由来などは不明である。 ・薬師堂については、破損がみられる。			
寺院史概略	・現在、荒尾に位置する曹洞宗の妙覚寺（応永元年に国東泉福寺二世明巌鏡照による開山）は、元々払田にあり室町時代初頭に移転したといわれている。払田には御堂野と呼ばれる場所があり妙覚寺が存在していたと伝わっている。 ・『弥勒寺喜多院所領注文』には、豊後国の所領として「妙覚寺　八丁」とみられる。この弥勒寺の末寺である妙覚寺と六郷山の妙覚寺の関係は不明であるが、同一の寺となる可能性が高いと考えられている。また、本来弥勒寺との関連が深かったと想定される妙覚寺は、その勢力の後退により六郷山へと加えられたと考えられている。 ・払田には、弥勒寺の寺僧である西別当・東別当・惣堂達の屋敷があり、その子孫は明治初年にそれぞれ西・東・惣達の姓を称して現在でも一部が払田に居住している。そのような環境からか払田には、弥勒院跡・薬師堂・毘沙門の祠・ガラン神の祠等が位置している。 ・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、本山本寺の高山の末寺として「妙覚寺」が記載されている。			

寺院現況及び変更点

・調査は伝妙覚寺跡とされる上払田地区の丘陵上を対象として実施した。報告は①旧妙覚寺跡・②弥勒院跡・③貴船神社・④薬師堂・④西側墓地・⑤北西側墓地・⑥発掘調査の成果に大別しておこなう。

〈①旧妙覚寺跡〉（図版②：旧妙覚寺跡周辺地形図参照）

・旧妙覚寺跡地は、「御堂野」と呼ばれており、現在でも溝状遺構や土塁を確認することができる。周辺の聞き取りにおいても、戦後の耕作中に大型の礫がよく出土したということである。妙覚寺に関する礎石・基壇等の石材として利用された可能性が考えられるが、推測の域は出ない。
・今回の調査では、妙覚寺跡地の東・南側において直線的な土塁（写真№１・２）を確認した。
・台地の中央には、観音堂跡が位置する（写真№３）
安置されていた観音像は、薬師堂（写真№26）に移転したという。
・観音堂跡地には、「桜墳」と刻まれた自然石碑（写真№５）及び、宝塔の宝珠部分と思われる部材（写真№４）を２点確認した。
・桜墳の自然石碑には、裏面に「観音堂□花の雲」の句があり、台座には「天明四年（1784）甲辰五月吉日、河野斉兵衛、払田村庄屋」とある。
・観音堂跡から小道を挟んだ東側端部の畑に、現在倉庫が建てられており、その北東側において板碑１基（写真№８）・塔身に梵字と仏像が彫られる笠塔婆１基（写真№７）・宝塔１基（写真№９）・五輪塔10基程・空風輪などの五輪塔部材（写真№10）を多数確認した。（写真№６）
・跡地の南西側には、「アミダホキ」のシコナが残されている小規模な平坦面が２段ほど形成されており、その段上に文化九年（1812）銘の石灯篭や板碑・石祠が位置している。（写真№11）さらにその東側奥には、文政二年（1819）と弘化二年（1845）銘の石祠や、鳥居の神額、五輪塔の部材などが残されている。（写真№12）以前の図面上に記載されているが、●マーク（赤丸）で追加表記した。
・跡地西側の宅地の庭に塚状となっている箇所があり、その上に30～40cmの礫と一緒に五輪塔の空風輪の部材を１点確認した。（写真№13）塚が立地している宅地の方に聞き取りしたところ、古くから塚自体は存在していたということであるが、五輪塔部材の出土地点や他の部材の有無などについては確認できなかった。
・この宅地から弥勒院跡へ向う道沿いに五輪塔の火輪（写真№14）と思われる部材を１点確認した。

〈②弥勒院跡〉（図版②：旧妙覚寺跡周辺地形図参照）

・弥勒院跡はかつての惣堂達屋敷と呼ばれている場所に昭和20年代まで存在していたとされるが、弥勒像が盗難されたために廃絶したという。現在では竹林になっており、堂の礎石等は確認できなかった。（写真№15）しかし、ほぼ埋没しているが石祠を１基確認し、図面上に追加した。（写真№16）
・弥勒院跡へと向かう畑地の途中に一石五輪塔・五輪塔の部材が集積（写真№17）されている箇所を確認した。
・五輪塔の集積より西側へ進むと、左手側に石祠２基と五輪塔の空風輪・火輪の部材や宝塔の宝珠部材等の集積（写真№18）を確認した。近隣の方の話によると、以前はこの祠の前より下段へと下る旧道が続いていたということである。

〈③貴船神社〉（図版②：旧妙覚寺跡周辺地形図参照）

・払田の丘陵の南側を東西方向に旧道が延びており、その道沿いに参道が位置している。道沿いには鳥居が位置しており、直線的な石段が延びている。境内には拝殿・本殿・伊勢社・稲荷大明神・弘法大師像等の近世段階での建物や石造物（写真№19～24）が位置している。この弘法大師像の側面にて中世の一石五輪塔２基や石造物の部材（写真№25）を確認した。

〈④薬師堂〉（図版②：旧妙覚寺跡周辺地形図参照）

・貴船神社より旧道をさらに東側へと進むと薬師堂（写真№26）へと至る。薬師堂には石造地蔵像３躯及び石造尊名不詳坐像１躯が安置（写真№27）されており、年に一度集落の方々で掃除を行い管理しているそうである。『豊後國都甲荘の調査』資料編では、石造薬師如来坐像、石造観音坐像（観音堂より移転）についても安置されていると記載されるが、現在では確認できない。薬師堂の前面には、石灯篭や手水鉢（写真№28）・石殿（写真№29）・五輪塔の火輪部材（写真№30）等が置かれている。石灯篭には側面に文化九年（1812）銘が残るが、その他は無銘である。これらの石造物については、範囲を破線状で図面に記載した。
・薬師堂の南側には石碑（写真№31）が１基存在している。全文を確認できなかったが、溜池・用水路に関連するものと思われる。
・石碑の西側にある竹林内に埋没している石祠（写真№32）を１基確認した。この石祠の北側には、板石状の自然石があり石碑のようにもみえる。以前の図面に比べやや南側に移動しているようである。

〈⑤西側墓地〉（図版③：旧妙覚寺現況図参照）

・旧妙覚寺跡から西側へ直線距離で約300mの位置に西・東・惣達・都甲氏の墓地が形成されている。
・墓地の中央部には天正六年（1578）銘の異形国東塔１基（写真№33）・宝塔１基（写真№34）・五輪塔１基（写真№35）・相輪と思われる部材を１点・石造仏１躯を確認した。この相輪と思われる部材のすぐ横で、

五輪塔の空風輪と火輪が埋没しているのを確認した。墓地入口付近においても同じように埋没している空風輪と火輪、石殿（写真№36）を１基確認した。異形国東塔以外は、銘文が無いがその形態から中世末～近世初頭と考えられる。
・中世の石造物の周囲には、江戸時代前期の寛永十五年（1639）から中期にかけての墓碑が展開している。各家が墓地として明瞭に区分けされるのは18世紀後半からである。

〈⑤北西側墓地〉（図版③：旧妙覚寺現況図参照）
・旧妙覚寺跡から北西側に直線距離で約250mの位置に墓地は形成されている。六地蔵や五輪塔の水輪と思われる部材等がみられる。また、石造仏や墓石が埋没しているのが目立つ。

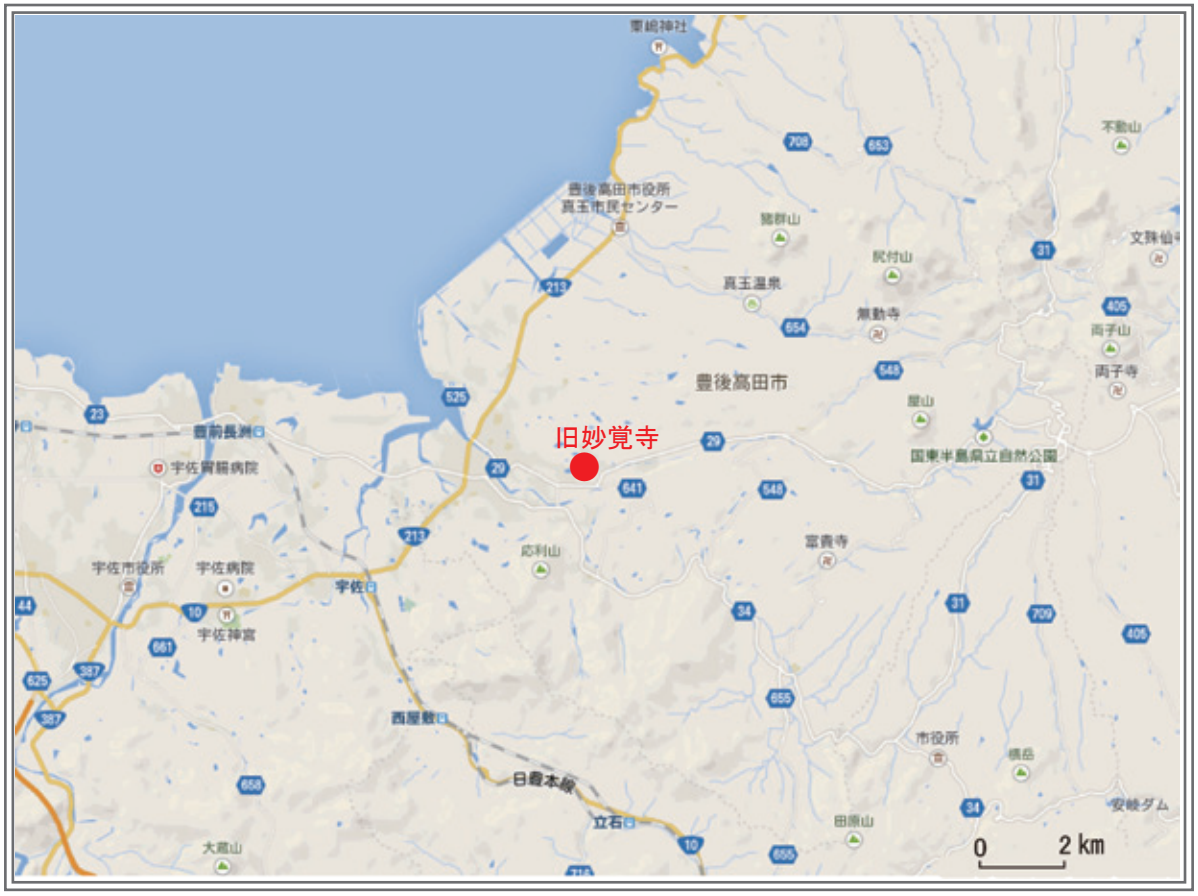
〈⑥発掘調査の成果〉
・伝妙覚寺跡のかつて礎石らしき大型の礫石を除去した事があるという畑地を調査対象としてⅠ～Ⅲ区を設定し行われた。
・Ⅰ区では、トレンチ調査ではあるが土坑１基・溝状遺構３条を確認している。土坑からは、四個の礎石と思われる石を確認している。いずれもその規模は直径約80cmの扁平なもので、土坑内に小さな河原石多数とともに落とし込まれた状況であった。原状を保つものではなく、畑地化した際に除去した痕跡と思われる。
・溝状遺構は４条を確認している。その中でも２・３号溝は、16世紀代の遺構によって切られており、中世の遺構と考えられる。２号溝は屈曲しており区画溝であろうか。
・Ⅱ区は畑地の境であり、かつて堀と土塁が存在していたことが聞き取りされており、トレンチを１本設定した。その結果、掘と土層観察によって土塁が確認されている。
・1998年に観音堂跡地周辺の畑地においてトレンチ調査が実施されている。しかし、寺院跡を示す痕跡は確認されていない。
・払田における発掘調査の成果としては、Ⅰ区において16世紀以前に礎石を伴う建物の存在が確認されたことがあげられる。ただ、古代・中世の瓦類は出土しておらず瓦葺きではなかったと思われる。

≪主要参考文献≫

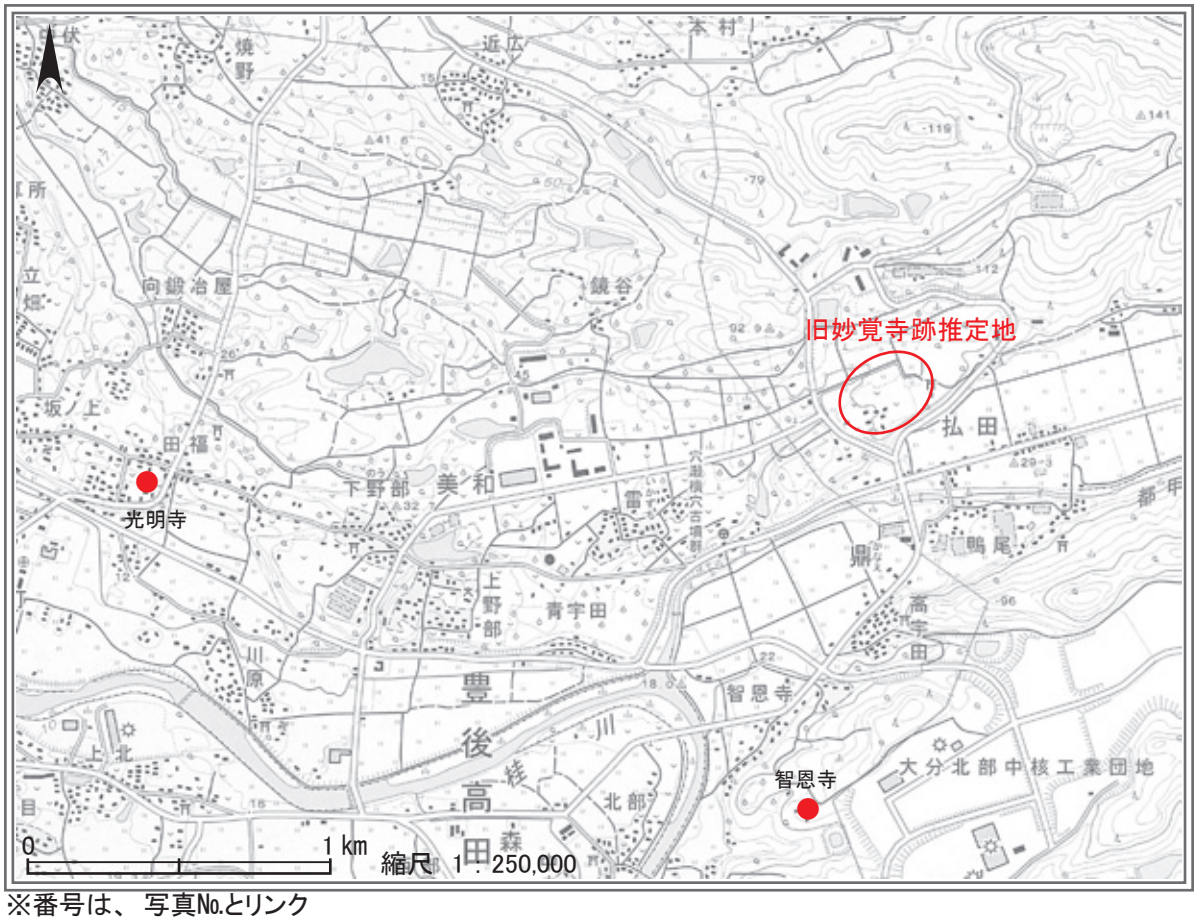
・『豊後国都甲荘の調査　本編』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 11 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1993
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』大分県立歴史博物館調査報告書第４集　大分県立歴史博物館　1999
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要ー豊後高田市・真玉町・香々地町の部ー』 大分県文化財調査報告書　第 37 輯　大分県教育委員会　1976

図版①　旧妙覚寺　位置図

市域位置図

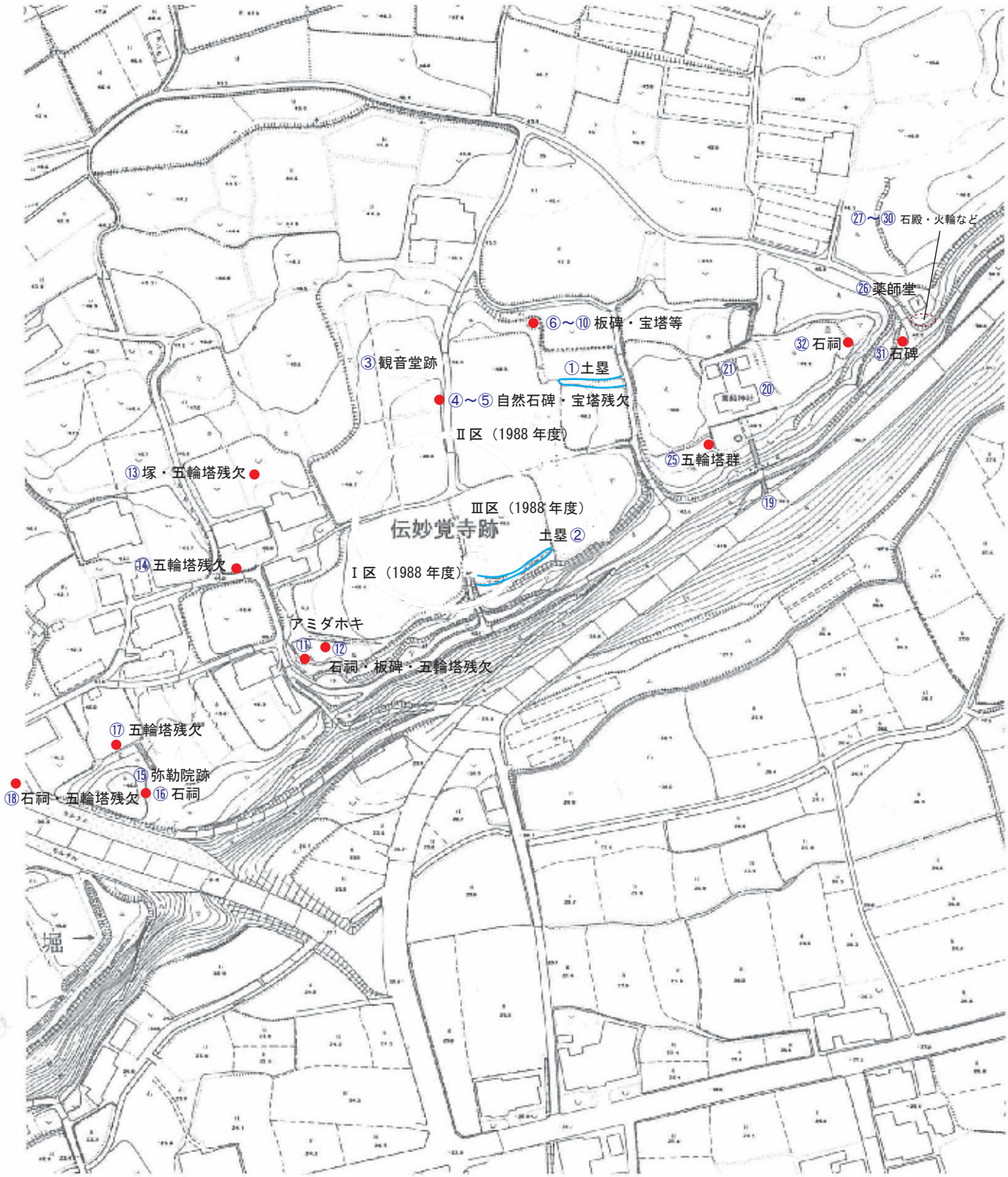


詳細位置図



※番号は、写真№とリンク

図版②　旧妙覚寺跡周辺地形図（周辺石造物分布）



※番号は、写真No.とリンク

都甲地区

図版③　旧妙覚寺現況図

旧妙覚寺現況図

文化財の現況・詳細（1）

1：東側の土塁　図版②参照／時期：中世

・東西方向に直線的に延びる。

2：南側の土塁　図版②参照／時期：中世

・丘陵に沿うように東西方向に延びる。

3：観音堂跡　図版②参照／時期：－

・現在は畑地となっている。
・観音像は薬師堂（写真№26）に移転したとされるが、現在では確認できない。

4：宝塔部材　図版②参照／時期：中世か

・観音堂跡において宝塔の部材を確認した。

5：自然石碑　図版②参照／時期：天明４年

・正面に「桜墳」裏面に「観音堂［　　］花の雲」と刻まれる。
・台座に「天明四年（1784）、河野斉兵衛」とある

6：石造物群　図版②参照／時期：中世

・笠塔婆・板碑・宝塔・五輪塔が並べられている。

都甲地区

7：笠塔婆　図版②参照／時期：中世

・笠塔婆の龕部に尊像及び梵字がみられる。
・空風輪部・笠部・龕部の規模が相違しており別部材を組み合わせたものか。

8：板碑　図版②参照／時期：中世

・銘文等は残されていない。

9：宝塔　図版②参照／時期：中世

・別部材を組み合わせた可能性がある。

10：五輪塔群　図版②参照／時期：中世

・五輪塔群が集積されている。

11：石祠・板碑　図版②参照／時期：文化９年

・石祠内に尊像が２躯安置される。
・板碑には梵字がみられる。
・石灯篭には文化九年（1812）銘が残る。
・「アミダホキ」のシコナが残る

12：石祠　図版②参照／時期：文政２年

・中央の石祠に文政二年（1819）銘が、左側の石祠には弘化二年（1845）銘が残る。
・神額には大神宮の銘が残るが、周辺に鳥居の部材はみられない。

文化財の現況・詳細（3）

13：塚状の高まり

図版②参照／時期：不明

・五輪塔の部材が集積されている。

14：五輪塔部材

図版②参照／時期：近世か

・五輪塔の火輪が残される。

15：弥勒院現況

図版②参照／時期：中世

・惣堂達屋敷と呼ばれている。昭和20年代まで堂があり、弥勒像を安置していたという。弥勒像が盗難され廃絶したという。
・現在は竹林となっている。

16：石造物

図版②参照／時期：近世

・弥勒院跡において確認したが、埋没している。
・石祠と推定される。

17：五輪塔群

図版②参照／時期：近世か

・弥勒院の北側にて五輪塔部材の集積を確認した。

18：石祠

図版②参照／時期：近世

・石祠及び五輪塔部材が確認されている。

19：鳥居　図版②参照／時期：寛政２年

・左柱に「寛政庚戌（1790）冬至日　脇長之謹銘」と残る。

20：拝殿　図版②参照／時期：近代

・２間×５間の建物である。

21：本殿　図版②参照／時期：近代

・本殿の左側に伊勢社・右側に稲荷大明神が祀られる。

22：伊勢社　図版②参照／時期：近代

・伊勢社は、覆屋内に祀られる。
・社にはやや傷みがみられる。

23：石祠群　図版②参照／時期：近代

・伊勢社の側面に位置する。
・６基の石祠が位置しており、左端に天保六年（1835）銘が残る。
・石灯篭は正徳二年（1712）に河野□兵□重□によって寄進されたものである。

24：稲荷大明神　図版②参照／時期：近代

・稲荷大明神は、覆屋内に祀られる。建物にはやや傷みがみられる。

25：五輪塔群　図版②参照／時期：中世

・拝殿前面に弘法大師像が位置しており、その側面にて五輪塔群を確認した。

26：薬師堂　図版②参照／時期：近世

・１間×２間の建物であるが、破損がみられる。

27：薬師堂内　図版②参照／時期：近世

・石造地蔵立像が３躯、石造尊名不詳坐像１躯が安置されている。
・観音堂跡（写真№３）より移動された観音像は確認できない。

28：石造物群　図版②参照／時期：文化９年

・境内に石殿・灯篭台座・手水鉢が位置している。
・灯篭には文化九年（1812）銘が残る。同年号の石灯篭がアミダホキ（写真№11）でも確認されており、同時期に整備されたものであろう。

29：石殿　図版②参照／時期：近世か

・正面に尊像が陽刻される。
・銘は刻まれていない。

30：五輪塔部材　図版②参照／時期：近世か

・石灯篭・手水鉢の背後に五輪塔の部材である火輪を２点確認した。

31：石碑　図版②参照／時期：昭和２年

・昭和二年建立の銘が残る。
・全文は解読できないが、溜池の完成、もしくは用水路完成を記念したものと想定できる。

32：石祠　図版②参照／時期：近世

・埋没した状況で確認されている。
・銘などは不明である。

33：異形国東塔　図版③参照／時期：天正６年

・墓地の中央に位置する。
・天正六年（1578）銘が残る。
・相輪部の九輪は形成されず、宝珠は簡素化されている。

34：宝塔・墓碑群　図版③参照／時期：中世末～近世

・異形国東塔のやや東側に位置する。
・中世末から近世初頭にかけての石造物が残る。

35：五輪塔　図版③参照／時期：近世か

・笠部稜線が直線的であり、近世であろう。

36：石殿　図版③参照／時期：近世

・墓地の東側入口付近に位置する。
・正面に二童子が陽刻される。